

41466

教科書文庫

4
810
41-1938
200030 1690

1474

1831

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

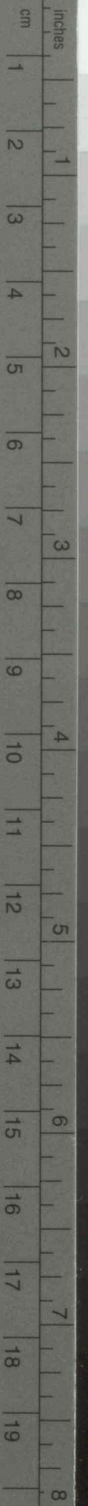


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
T010
資料室

新制國語讀本

新教授要目準據

七卷

資料室

375.9
To 10

高田

日一月二年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學業實科文漢語國校學中

學習院教授

東條操編

廣島縣高田中學校

四學年

田廣司



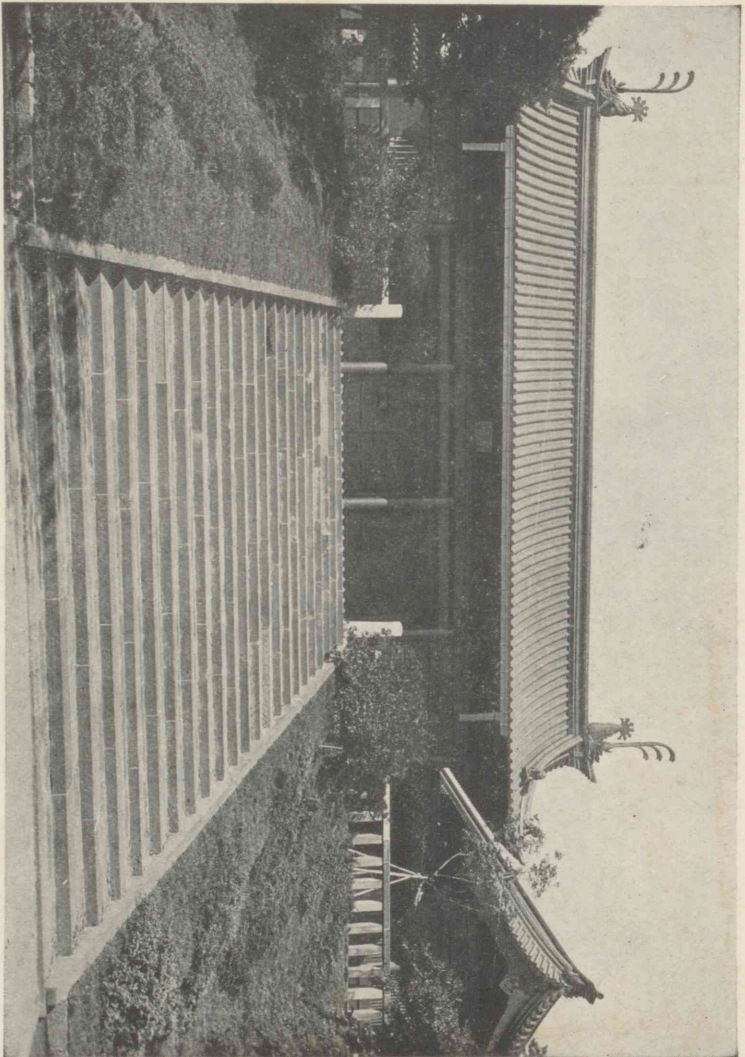
新制國語讀本 卷七

新教授要目準據

東京 三省堂
大阪

廣島縣高田郡秋越村

廣島大學圖書印



(照參課二十二第)

堂

聖

卷七 目次

一	東洋の詩趣
二	理想
三	折節の移りかはり
四	旅行論
五	奥の細道
一首	途
二	白河の關
三	松島

夏目漱石	一
阿部次郎	二
吉田兼好	一六
山路愛山	三三
松尾芭蕉	二八
途	二八
白河の關	三〇
松島	三一

目次

四平 泉
五象 湯

〇六 正風興隆

荻原井泉水

三六

〇七 閑古鳥

(諸家)

四三

八百 蟲譜

横井也有

四五

〇九 狂文二篇

平賀源内

四九

一浮 世

石川雅望

四九

二鍾馗の畫賛

徳富猪一郎

五一

〇一〇 風雅論

源實朝

五六

一一 那須の篠原

(太平記)

五八

一二 落花の雪

休夏

一三 鹽原

尾崎紅葉 六四

一四 足跡

相馬御風 六九

〇一五 深い心

得能文 七一

〇一六 檀園文抄

中島廣足 七五

一燕

七五

二書

七六

三漁村

七七

四山家の興

七九

〇一七 民謠

島木赤彦 八一

〇一八 ゆく川の流れ

鴨長明 九〇

一	一九 十六夜日記抄
二〇	山庵雜記
二一	社會と感激
二二	世界の四聖
二三	心と言葉
二四	將來の日本
二五	近世明治の文學
一 近世	
二 明治	

阿佛尼	九八
北村透谷	一〇二
中澤臨川	一〇四
高山樗牛	一〇八
和辻哲郎	一三二
鹿子木員信	一三七
一三五	
一三五	
一四九	

— 目次 終 —



新制國語讀本 卷七

一 東洋の詩趣

夏目漱石

夏目漱石
 名は金之助。英
 文學者。小説家。
 東京市の人。大
 正五年歿、年五
 十。

山路を登りながらかう考へた。
 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば
 窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、
 易いところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟
 った時、詩が生れ、畫が出来る。
 人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向
 う三軒兩隣にちらくする唯の人である。唯の人が作つた人の
 世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの

國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間



山 水 (夏目漱石筆)

の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あら

ゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊にするがゆゑに尊い。住みにくい世から、住みにくい煩ひを引抜いて、有難い世界を眼のあたりに寫すのが詩である。畫である、あるひは音樂と彫刻で

煩悩即菩提

境を

道徳のわかれた
天の世

乾坤

ある。細かにいへば、寫さないでもよい。たゞ眼のあたりに見れば、そこに詩も生れ歌も涌く。着想を紙に落さないでも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青は畫架に向つて塗抹しないで、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀し得て、靈臺方寸のカメラに、澆季、溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足る。このゆゑに、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀し得るの點に於て、かく煩惱を解脱し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜びの深きとき憂ひ

愈、深く、楽しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片付けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寝る間も心配だらう。閑僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとは不愉快だ。

忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えない。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしく、絶え間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、ゐたゞまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴き盡し、鳴き明し、また鳴き暮さねば氣が濟まぬと見える。その上、どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違

シェレー
英國の詩人（西
紀七五—一六三）。

ない。昇りつめた揚句は、流れて雲に入つて漂うてゐる中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへも忘れて正體なくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在處あつかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内で覺えたところだけ誦誦して見たが、覺えてゐるところは二三句しかなく、その二三句の中にこんながある。

前を見ては、後しりへを見ては、物欲しと、懂るゝかなわれ。

腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想ひ、籠るとぞ知れ。

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して我が喜びを歌ふわけにはいくまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく「萬斛の愁ひ。」などといふ詞がある。

暫くは路が平らかで、右は雑木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へおして、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣を取られて、踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座してゐる。暢氣なものだ。また考へを續ける。

詩人に憂ひはつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持に

なれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も——櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、うまいものが食べられないことぐらゐだ。併し、苦しみのないのは何故だらう。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの景色——腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬこの景色が、景色としてだけ余の心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり、人の世につきものだ、余も三十年間それを仕通して飽きくした。飽きくした上に芝居や小説で同じ刺激が繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出ることが出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨して居る。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

嬉しい事に、東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。

採_ル菊_ヲ東籬_ニ下。 悠然_{トシテ}見_ル南山_ヲ。

たゞそれきりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の人が覗いて居る譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨_リ坐_シ幽篁_ノ裏_ニ。 彈_シ琴_ヲ復_シ長嘯_ス。

深林_ノ人_ヲ不_レ知_ラ。 明月_ヲ來_リ相照_ス。

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立して居る。この乾坤の功德は、不如歸や金色夜叉の功德ではない。汽船汽車權利義務道德、禮儀で疲れ果てた後、總べてを忘却してぐつすりと寢込むやうな功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味

採_ル菊_ヲ東籬_ニ云々
晉_ノ陶淵明_ノ
詩_ニ飲酒_ニ二十首_ノ
の1。

獨_リ坐_シ幽篁_ノ裏_ニ云
唐_ノ王維_ノ竹里
館_ノ詩。

王維

字は摩詰。支那唐代の詩人。上元(西紀七〇六)の初歿。年六十。

淵明

名は潛。支那晉時代の人。詩文に長ず。元嘉四年(西紀四二七)歿。年六十三。

ファウスト

獨逸の文學者ゲーテの作。劇詩。

ハムレット

英國の文學者シェイクスピアの作。戯曲。

は大切である。惜しいことに、今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざわざ暢氣な扁舟を浮べて、この桃源に遡るものは無いやうだ。余はもとより詩人を職業にして居らないから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣めようと言ふ心掛も何もない。たゞ自分には、斯う言ふ感興が演説會よりも舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりもハムレットよりも有難く考へられる。斯うやつて、たゞ一人繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそくあるくのも、全くこれが爲である。淵明王維の詩境を直接に自然から吸収して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

(漱石全集、第二卷)

阿部次郎

東北帝國大學教授。哲學者。山形縣の人。明治十六年生。

二 理想

自分から思ふ。完全な人々。世間。此の世界。

阿部次郎

當來社會の基礎は、理想主義的精神の徹底によつて始めて築かれる、私は此の事を確信して疑はない。今日の急務は、弘めるまゝに漂ひゆく精神をひきしめて理想主義の見地を確保しつゝ、自己と社會との改造を畫策することである。

甲はいふ、理想を持つ者には思ひきつた金儲が出来ないと。乙はいふ、卓越した事功を現世に擧げようとする者にとつて、理想はたゞ足手纏となるに過ぎないと。丙はいふ、理想の色は灰色である。流通して凝滞するところなき地上の享樂に、それは徒らに憂鬱の影を投げようとする。これを口にするとせぬとに論なく、所謂經驗に富んだ世間師は大抵かういふやうな理由を腹の底に貯へて理想を忌避しようとする。しかし彼等が理想を忌避する

疾しさ

矛盾

つりつり
はね事

ことは、却つて反面から理想の權威と彼等の生活目的の疾しさを證明するものといはなければならぬ。本當に公に生きることを知るものにとつては、理想は何の足手纏でもない。理想は固よりこれと矛盾するものを禁止する、これと矛盾する限り、金儲をも、現世の事功をも、地上の享樂をも禁止しようとする。そして此の禁止は吾々を苦しめる。しかし此の苦痛を甘受し、此の苦痛をさへ一つの積極的の力として、人生の一大事に立向はしめるところに、理想の理想たる所以があるのである。

或人は又曰ふであらう、人間の智慧は弱少である、吾々は千萬年の後を見きはめる力を持つてゐない。理想の力はそれが永遠性をもつことによつて始めて確乎不拔となるであらうが、永遠の理想を認識することは到底人力のよくするところではない、それよりは寧ろ、永遠のことはこれを永遠に任せ、吾々は人間らしく謙遜

ユートピヤ
理想郷

に、現實的に、其の日くゝを生きて行けばそれでよいではないかと。此の思想には一理がある。若し理想主義とは理想内容の固定を條件として、吾々が懷抱する理想の觀念の進化發展を許さぬものであるならば、それは確に身の程を忘れた人間の傲慢の一兆候たるに過ぎないであらう。若し又理想に従つて生活するとは、千萬年の後のユートピヤを描いて、これを目標として生活することのみ意味するならば、吾々は明日のために今日を空しくし、其の日其の日の生活の意味を永久に他日に繰越してゆくといふ謗を免れないであらう。しかし理想に従つて生活するとは、或主義に従つて其の日くゝの生活に内容を與へてゆくことであつて、必ずしも千萬年後のユートピヤを目標とすることを意味するのではない。此の點に論者の誤解がある。理想の本義は、吾々の前途にユートピヤを描き出すところにあ

人格價值

るのではなくて、吾々の生活に方向を與へるところにある。凡そ方向を決定することを要するところには、それを決定すべき原理——換言すれば理想がなければならぬ。理想の實現は久遠の未來にあつても、理想の作用は吾々の一日々々にある。一日々々の生活に方向を與へ、これに永遠に參する意義を與へるものは理想でなければならぬ。愛や正義や人格價值の充實や——此等諸の觀念は吾々の生活に方向を與へるものとして、此の意味の理想に屬する。さうして假令愛や正義や人格價值等の概念は、其の内容に就いて社會的個人的に様々の變容を受けることがあつても、此等の觀念其のものが理想として適用することは人類が人類として存續する限り、恐らく變ることがないであらう。人間の智慧は誠に弱少であるが、吾々が省みて自己の衷心から確實なものを擲み出す力を持つ限り、原理としての理想は、決してそんなあやふや

なものではないのである。

原理としての理想が深く人の心を衝動するに對して、現實の生活がそれと矛盾することの甚しきを意識するとき、吾々の心熱は理想の實現を夢想して、そこに憧憬の情を寄せようとする傾向を持つ。ユートピヤとしての理想はこゝに生れる。しかし此の如きユートピヤと雖も、これを求める原理が正當で、これに憧れる心熱が深刻である限り、それは心から人を動かすことによつて人類を一步理想の世界に接近せしめる。假令誤れるユートピヤにもせよ、眞摯にこれを求めようとする努力は、決して空には終らない。彼のコロンプスの東洋に航しようとする企圖は失敗に歸したにも拘らず、彼が其の失敗の結果としてアメリカ大陸を發見したなどは、其の一例である。

コロンプス
十五世紀のイタ
リヤの航海家。

吉田兼好

姓は卜部。文學者。歌人。正平五年(1190)歿、年六十八。

三 折節の移りかはり

吉田兼好

物のあはれは云

「春はたゞ花の重に咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる。」

(讀人知らず、拾遺集)

花橘は云々

「さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」

(讀人知らず、古今集)

折節の移り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今ひときは心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやうくけしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬づに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古の事も立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに藤の覺束なき様したる、すべて思ひ捨て難き事おほし。「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂り行く程こそ、世のあは

あやしき家

なまめかし

源氏物語

五十四帖。一條天皇の時(天曆七—六七)紫式部の著した小説。

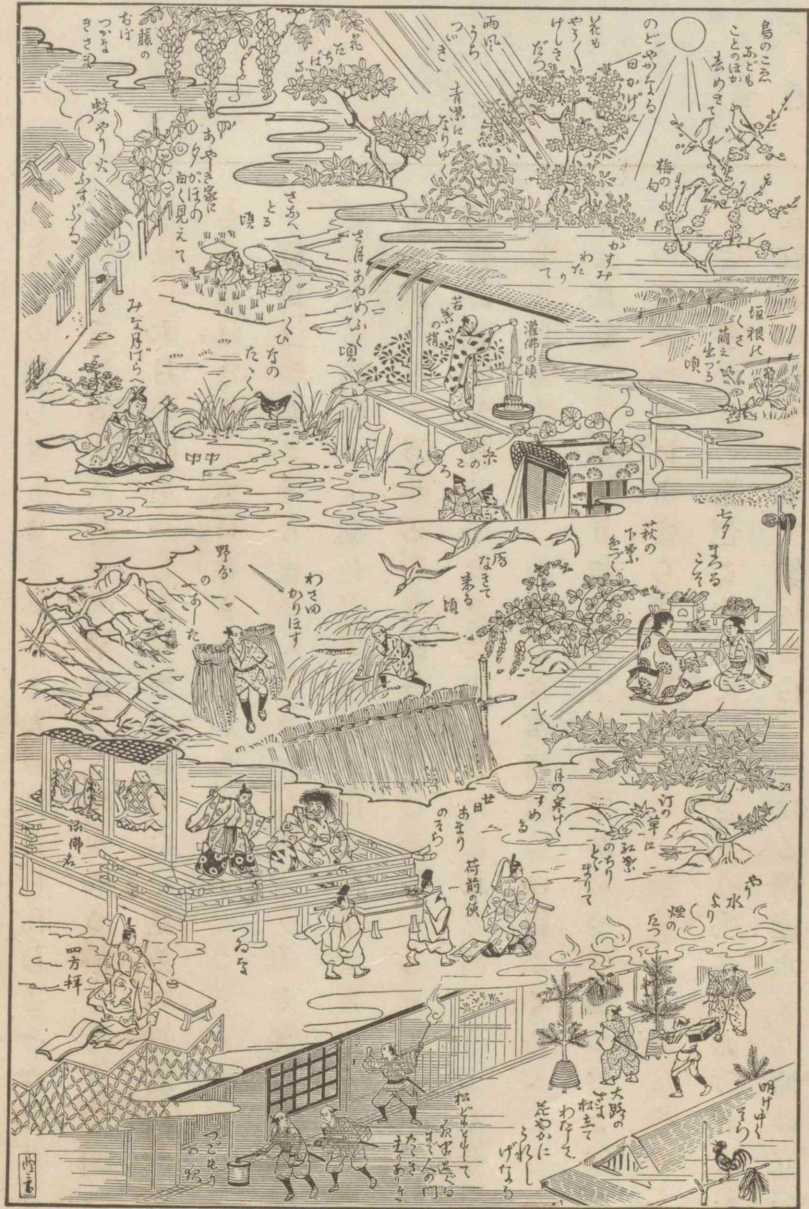
枕草子

清少納言の著した隨筆。

おぼしき事云々
「おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。」

(大鏡)

れも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそ實にさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞の敲くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月みづきばらへ祓はらへまたをかし。棚機まつるこそなまめかしけれ。やうく夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈り干すなど、とり集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば皆源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢき無きすさびにてかいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬がれの景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止りて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそ



(茶二修茶久) り麦り福のいふりを

折節の移りかはり

御佛名
十二月十九日よ
り廿一日まで三
夜清涼殿に行ふ
御佛事。
荷前の使
十二月中旬、十
陵八墓に幣帛を
奉る勅使。

をかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ又なく
あはれなる。すさまじき物にして見る人も無き月の寒けく澄め
る廿日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使たつな
どぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ね
て催し行はるゝ様ぞいみじきや。追難より四方拜に續くこそお
もしろけれ。つごもりの夜いたう聞きに、松どもともして夜半す
ぐるまで人の門敲き走りありきて、何事にかあらむ、事々しく罵り
て足を空にまどふが、曉がたより流石に音なくなりぬること、年の
名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都に
は無きを、あづまの方には、なほ爲る事にて有りしこそあはれなり
しか。斯くて明け行く空の景色昨日に變りたりとは見えねど、引
きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして花やかに
嬉しげなるこそ又あはれなれ。

山路愛山

名は彌吉。評論家。東京市の人。大正六年歿。年五十四。

秋風白河

秋風白河の關
一都をば霞と共
に立ちしかど秋
風ぞ吹く白河の
關。

(能因法師)

跋涉

四旅行論

山路愛山

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我が中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興を湧出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道にはあらず。自然は唯質問を發する者にのみ答辯を與へ、來りて見る者にのみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋涉し、而して後首を回して故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より馴れ來れる某山某水は、始めて遙なる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なく

寸碧

寸碧

して飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし云へば、大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して、自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は即ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在りて始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。嘗て我は、蜻蜒を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇との異なる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に何の感興も與へざり

し自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て、最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初なれば、杜鵑花霧島紅の雨を降らし、時若し秋なれば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、山重水複疑無路。柳暗花明又一村。前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し。忽ちにして山廻り、天闊く、鶏犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情、果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に没風流の徒と雖も、終に黄金以外眞の娛樂あるこ

放翁

南宋の詩人陸游の號。此の詩は「遊山西村」と題するもの。

桃源一村

武陵桃源は假想の理想郷。晉の陶淵明の「桃花源記」に見ゆ。

とを知るに至るべきなり。

或は又朝まだきに旅立すれば、駒の歩みに連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙も後へに翹き、清爽の氣身を襲ふ。残月彼方の山の端に懸り、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗と地歩を争ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて、自ら多年風雨の侵蝕を示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、これ皆旅行に非ずんば得べからざる底のものに非ずや。燕村嘗て句あり。

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡のごとき浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總べて是一幅の畫圖なり。而して春天穩やかにして「富士おろし」吹かず、空氣は漣波だも動かざる水に似たり。忽ち羽蟻の飛ぶあ

燕村

本名は谷口寅。俳人。攝津國(大阪府)の人。天明三年(西曆一八一三年)歿。年六十八。浮島ヶ原、靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾野。

劉は起り

漢の劉邦、沛より起つて天下を併せた。

シーザー

羅馬の政治家。嘗て文武の大權を握つたが、後反對黨の刺殺する所となつた。

東坡

本名は蘇軾。東坡は號、字は子瞻。宋の文學者。宋の建中靖國元年（西紀一二〇一）歿、年六十。此の詩は「眞興寺閣」と題するもの。

り、靜中纔に動あり。駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此の如き春景、豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖つきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數箇の山脈は蛇の如く邑を圍み洲を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如く見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。原子と原子と相撃ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の状態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の所謂「山川、與城郭、漠々同一形。市人、與鴉鵲、浩々同一聲」なるものは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは、即ち哲學の講壇に坐するものなり。

雲雀よりも云々
「雲雀より上にや
すらふ峠かな。」
(芭蕉)

山のあなた云々
「み吉野の山のあ
なたに宿もがな
身のうき時のか
くれがにせむ。」
(讀人知ら
ず、古今集)

天つ雲
源三位頼政の
歌

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に生れたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠にやすらひて、身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙なる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆる越の海の

浪をわけてもかへるかりがね

天青くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舎多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て、自然は人をして無限ならしむるものなり。これ旅行より學び得たる自然の教訓にあらずや。

(愛山文集)

松尾芭蕉
名は宗房、別號は桃青、俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(三五四)歿、年五十一。

月日は云々
「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。」
(李) 白

去年
元祿元年(三五〇) 江戸(東京)深川の芭蕉庵

白河の關
磐城國(福島縣)西白河郡古關村大字旗宿

杉風
本名は鯉屋藤左衛門、芭蕉の門人。江戸の人。享保十七年(三三三)歿、年七十八。

俳人 五奥の細道

一首 途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上
に生涯を泛べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を
住家とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、
片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋、
江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空
に白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神
の招きにあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つ
けかへて、三里に灸するより、松島の月先づ心にかゝりて、住める
方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

松尾芭蕉



(筆齋鐵岡富) 讚畫蕉芭尾松

此旅法

谷中
東京市の上野公園から西北に續く地。
千住
東京の東北口。奥州街道最初の宿驛。

感可花遊法
恨別鳥敷心

草加
武蔵國(埼玉縣)北足立郡奥州街道の宿。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺幽に見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。睦まじき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ、胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の眼は涙

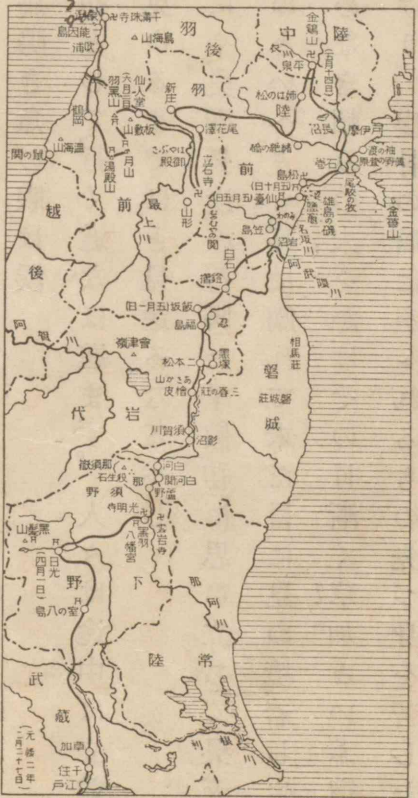
これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、うしろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの先づ身を苦しむ。

幻に實際に魚の物もある標に考へる

身すがら

唯身すがらにと
いでたち侍るを、
紙衣一衣は夜の
防ぎ、浴衣、雨具、墨
筆の類、あるはさ
り難き銭などし
たるは、さすがに
うち捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。



二 白河の關

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。
いかで都へと便り求めしも理なり。中にも此の關は三關の一に
して、風騒の人心を留む。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の

いかで都へ云々
「たよりあらばい
かで都へつげや
らむけふ白河の
關は越えぬと」
(平兼盛、拾遺
集)
三關
勿來の關、
念珠が關、
白河の關。

後松尾東
後月一
都へは書きたる
あしな、松尾東
白河の關

古人冠を正し云

藤原清輔の著し
た袋草紙に此の
記事がある。

清輔

藤原清輔、二條
天皇の頃の歌
人。

會良

俗稱は河合宗五
郎、芭蕉の門人、
旅行の同伴者。
寶永六年(三三六)
歿、年六十二。

洞庭

支那湖南省に在
る大淡水湖。

西湖

支那浙江省に在
る湖。

浙江

支那浙江省に在
る、一名錢塘江。

想像弁林

稍なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも
越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆
にもとゞめ置かれしとぞ。 (敬意もあつて)

卯の花をかざしに關の晴着かな

會良

三 松島

抑事ふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に
恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々
の數を盡して、欲つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は
二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱
けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹
き撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神の昔、大山祇の
なせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さむ。

雲居禪師
瑞巖寺の中興の
祖。萬治二年三
三の寂、年七十
八。

平泉
陸中國(岩手縣)
西磐井郡に在
る。

あねはの松
陸前國(宮城縣)
栗原郡に在る。

緒絶の橋
同國志田郡に在
る。

石の巻
同國牡鹿郡の町
に在る。

黄金花咲く
すめろぎの御代
榮えむとあづま
なるみちのく山
にこがね花咲
く。(萬葉集)

雄島が磯は地續にて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂松笠などうち煙りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐しく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺めまた改りぬ。江上に歸りて宿を求むれば窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

四 平泉

十二日平泉と志し、あねはの松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡稀に雉兔芻蕘の往き交ふ道そこともわかず。つひに道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立

高館の跡
衣川館の跡
和泉の城

袖の渡り
陸前國(宮城縣)
桃生郡橋浦町に
在る。

尾駮の牧
同國牡鹿郡稻生
村に在る。

眞野の萱原
同國牡鹿郡稻生
村に在る。

長沼
同國登米郡新田
村に在る。

戸伊摩
同郡登米町。

三代
藤原清衡・基衡
秀衡の三代。

秀衡
陸奥・出羽押領
使基衡の子。文
治三年(八七五)
治三年(八七五)歿。
秀衡の御所をい
ふ。

金雞山
秀衡、此の山を
富士に象つて築
き嶺に黄金の雌
雄の雞を埋め
た。

高館
衣川館。義經の
居館。

續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人もなし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、



平泉

あくれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り、尾駮の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其の間廿餘里程とおぼゆ。三代の榮耀一炊の中に、して、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を残す。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城を繞りて、高館の下にて大

居館。泰衡の第二子。秀衡の第二子。國破れて云々。「國破山河在、城春草木深。」(杜甫)

象潟 羽後國(秋田縣)由利郡、鳥海山の西北麓に在る。

酒田 羽後國(山形縣)飽海郡最上川口に在る。
鳥海山 秋田・山形の兩縣に跨り、日本海岸に聳えてゐる。海拔二二三〇米。

河に落ち入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと、
評釋、如何にも人間の榮華ははかなもウカ白髪はソコソコ續イカス。

五象潟

江山水陸の風光、數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の際十里、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。

其の朝天よく霽れて、朝日花やかにさし出づるほどに象潟に舟

能因島

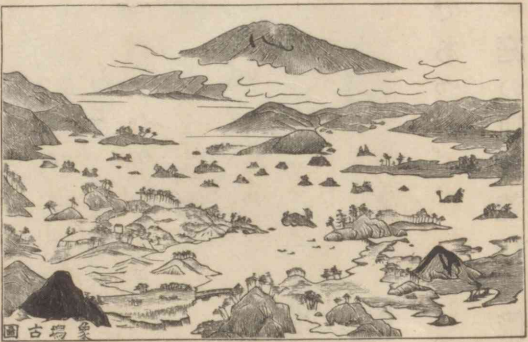
能因法師の幽居の跡といふ。花の上漕ぐ云々。波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟。(西行法師)

干満珠寺 今は鮮満寺といふ。曹洞宗の寺。

むやくの關 羽前國(山形縣)南村山郡に在つたといふ。

西施 支那、越の美女。

をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向



象潟古圖

うの岸に舟を上げば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。寺を干満珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眸の中に盡きて、南に鳥海天を支へ、其の影映りて江にあり。西はむやくの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、浪打入るゝ所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、倂松島に通ひてまた異り。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を悩ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

(奥の細道)

荻原井泉水
名は藤吉、俳人。
東京市の人。明
治十七年生。

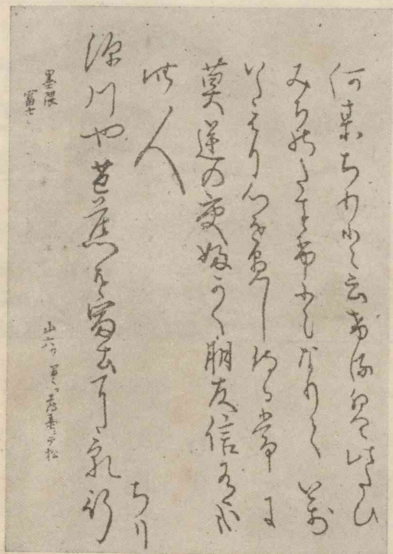
13. 6. 10. I

六正風興隆

荻原井泉水

或日芭蕉は窓に肱をかけて、物を思ふでもなく輝しい春のいき

づきに耳を傾けてゐた。江戸の同人達は、花を見る爲に暇を消してゐるのか、又は師の著述の邪魔をしまいとしか、庵を訪うて来る者が稀である事も、結局彼の心を淋しいまでに靜に澄ませたの



(行吟子甲) 蹟真蕉芭

であつた。

庭の池は荒れる儘になつてゐた。それは魚の^{いけす}築として用ひてゐた頃は手入も届いてゐたのであらうが、大火から後は全く棄て

て顧みられず、藻が浮いたり、蛙が棲んだりするのに任せきつてあつた。彼はこの毎日見慣れてゐる溜池に格別の風趣がある譯ではないが、あるが儘に物寂びた感じには飽きぬものがあると思つた。凡べて人が作つたものは如何に佳く出来てゐても、堅苦しい意力や智力が露出してゐるやうで面白くないものだが、その物が廢れて人の手から離れて「時」といふもの手に渡されてしまふと、「時」はそれをすつかり美化してしまふ。人は荒れるとか毀れるとか云つてそれを惜しむけれども、實はそれが新しかつた時、整つてゐた時よりも遙に本質的に美しくなつて来るのだ。築き上げたばかりの城よりも、草のぼう／＼とした廢墟の方がずっと美しいやうなものだ。それは人の手に虐げられてゐた物質が、自然のままに歸る處から来るのかも知れぬ。人間の短い生命を越えて流れてゐる、悠久な時間といふものの厳しさに觸れる爲かも知れぬ。

幽玄

兎も角、庭先に荒れるまゝに棄てられてある古い溜池の、物寂びた水面を見つめてみると、恐しく幽邃な感じに誘はれる。心がじつと澄み切つて、そこに漣も立てない水面その物のやうに、意識が止静の境に凝つてしまつたやうである。その時澄み切つた心の鏡に閃いて動く一つの生命があつた。止静した水面に音を立てて一匹の蛙が飛び込んだのだつた。大地の中から眼覺めて來た春の魂が、この輕快な生物となつて、死のやうな静寂を蘇らせたのであつた。悠久の相に浸り切つてゐた芭蕉の心は忽ち刹那の象にひき戻された。而してその刹那の相を通じて、再び悠久の眞實をしつかりと感得する事が出來た。「蛙飛び込む水の音」と、その時芭蕉の口に上つたのはこの短章であつた。——蛙飛び込む水の音、この音を彼は彼の心を以てしつかりと聞いた。この音を通して彼は大自然を象徴する幽玄のしたゝりを聞いたのである。この

昭和拾參年七月壹貳日

推敲商量



(傳詞繪翁蕉芭)庵蕉芭

音を通して彼は、宇宙の脈動する生命の寂しさを聞いたのである。この時口に上つた短章を捕捉して彼は一句を得た。

古池や蛙飛び込む水の音

「古池」の句を彼は自分ながら幾度となく吟じかへした。それは推敲商量をかさねて出來たものではなく、實に無造作に口をついて出たもので、不用意の獨りよがり落ちて居りはしないかとも反省して見たが、この平凡なありふれた瑣細な現象の中に籠つてゐる自然の味と、その味を無造作に巧まらずに率直に表現した言葉の味に自分としては始めて探り得た所の新しい味、それこそ本當の俳諧の味といふべきものがあるといふ自信を

すら得たのであつた。彼は又この句を鍵として新しい世界の扉を開いたやうに思つた。今までは外部から平面的に見つぶして、つまらないたゞ事を観じてゐた所のものが、それを内部からその生命を感じる事に依つて、いき／＼とした呼吸をもつて蘇つて來る。この不思議なる生命の祕密こそ、自然藝術の幽玄なる境地に求めらるべきものであると、彼は思つた。かれは今にして始めて、自分の藝術否詩歌の道の歸趨をはつきりと見極め得たと信じた。この道を以て、俳諧の新しい世界を開拓せらるべきものだと思つた。

尾張の同人は、嘗て芭蕉を迎へて始めて教へられた時の記念として、冬の日を出版した後、更にこの頃、同人唱和の歌仙三卷を得たので、それに俳句を添へて第二の句集「春の日」を出したいと、芭蕉の許迄云うて來た。彼は最近の作として「古池」の句を書いて送つた。

冬の日
貞享元年、(芭蕉及び門下の連俳を集めたもの)
春の日
俳諧七部集の一作。貞享二年の

野水
岡田氏。名古屋の人。

重五
加藤加右衛門。名古屋の人。

越人
越智氏。俳人。尾張國(愛知縣)の人。生歿未詳。

旦藁
生歿未詳。

貞徳派
松永貞徳の派。貞徳は徳川初期に出で、古風の俳諧を大成した。

談林派
西山宗因を祖とし、滑稽・奇抜を主とした俳諧の一派。

その集は秋になつてから上梓されたのを見ると、野水、重五等の以前からの連衆の外に、越人、旦藁等の新しい作家が多く加盟してゐた。

かうして彼は自分の培ひつゝある俳風が、到る處で詩境の眞實を愛する人々の心の中に、確な根を張つて行く事を感じてゐた。それは世間的の勢力や、人數といふ事を云ふのでなしに、藝術としての本質と、その上に獨自な新しさを持つてゐるといふ事の自信であつた。貞徳派はたゞ古い趣味を繰返すだけ、俳諧らしい俳諧といふだけに止つて、生命といふものがない。談林派は新しがり過ぎぬ。奇警と機智とで喝采を博しはするが、眞實といふものがない。是等は斷じて正しい俳諧の道を行くものではない。俳諧は一つの道である。道であるが故に人は一筋に進まねばならぬ。徒らに舊きを守つて進まぬ者も誤つてゐるし、擅に逸脱して

正風

奔放を誇つてゐる者も亦誤つて居る。貞徳流も談林派も邪道である。今の俳諧としてほんたうの道を踏んでゐる者は自分達だけである。かういふ信念は、この時から芭蕉の胸の中にしつかりと据ゑられて来た。俳諧の正しい道はたつた一つある、而して一つ以上はない。その道を行く者が自分達だ、自分達の俳諧こそ「正風」と名づくべきものであると彼は考へた。而してこの考へが愈、確に定ると共に、自分達の藝術のために、精根を盡さなければならぬといふ決心も、愈、深く彼の心に堅められたのである。

(旅人芭蕉)

△七閑古鳥

月に柄をさしたらばよき團扇かな

山崎宗鑑

落花枝に歸ると見れば胡蝶かな

荒木田守武

いつの間に夏はきぬの衣更えぬ

松永貞徳

白露や無分別なる置きどころ掛言葉

西山宗因

うきわれを寂しがらせよ閑古鳥

松尾芭蕉

しづかさや岩にしみいる蟬の聲

宗鑑 志那氏。近江國(滋賀縣)の人。天文十二年(三三三)歿、年八十九。
守武 伊勢國(三重縣)の人。天文十八年(三三三)歿、年七十七。
貞徳 京都の人。承應二年(三三三)歿、年八十三。
宗因 肥後國(熊本縣)の人。天和二年(三三三)歿、年七十八。

其角

榎本其角ともいふ。江戸の人。寶永四年(三三六)歿、年四十七。

嵐雪

淡路國(兵庫縣)に生れ、江戸に住む。寶永四年歿、年五十七。

丈草

尾張國(愛知縣)大山の人。寶永元年(三三六)歿、年四十三。

支考

美濃國(岐阜縣)の人。享保十六年(三三三)歿、年六十七。

猪も共に吹かるゝ野分かな

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春

梅一輪一りんほどのあたゝかさ

大原や蝶の出で舞ふおぼる月

そこもと涼しさうなり峯の松

山寺に米搗くほどの月夜かな

寶井其角

服部嵐雪

内藤丈草

各務支考

越智越人

横井也

名は時敏。俳人。尾張國(愛知縣)名古屋の人。天明三年(三四三)歿、年八十二。

莊周が夢云々

「昔者莊周、夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志與、不知周也。俄然覺、蘧々然周也云云。」(莊子)

古今

古今和歌集。その序文に、「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲きけは、いきとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々。」

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜に風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えぬ」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

八百 蟲 譜

横井也 有

貧の學者
晉の車胤。字は
武子。家貧しく
油を購ふことが
出来なかつたの
で夏日螢を燈と
して學んだとい
ふ。博學一世に
鳴った。

螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。



の雲に叫ぶにも劣るべからず。
蚊はにくむべき限りながら、さすが卯月の頃端居めづらしき夕、

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくつくぼふしといふ蟬は、つくし戀しといふなり。筑紫の人の旅に死にて、このものになりたりと世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂

七賢
支那晉の竹林の
七賢。

阮籍
嵇康
山濤
向秀
劉伶
王戎
阮咸



こがね蟲

始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは、淋しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊遣焼く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。
蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたが爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物好きの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲は卑し。
蟻は明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。さるもたより悪しき方に穴を營みて、千丈の堤は崩さずもあらなむ。
蝸牛は家をもちたれども、行く先々を負ひあるくは水雲の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

原
駿河國(静岡縣)
駿東郡に在る
町。

吉原
同國富士郡に在
る町。

きりくす云々
「秋風にほころ
びぬらし藤ばかり
まつりさせて
ふきりくす鳴
く。」

(古今集)
藻に棲む蟲云々
「あまのかる藻
にすむむしのわ
れからとねをこ
そ泣かめ世をば
うらみじ。」
(古歌)

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕に乗りて、富士を眺めゆく人にぞ似たる。

促織はたおり鈴蟲、蟻蟲は、その音の似たるをもつて名によべり。松蟲のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりくすのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲はわれからと、たゞ身のうへをなげくらむを、蓑蟲の「ちよよ」と呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ慕ふらむとあやし。

(鶉衣)

九狂文二篇

一浮世

平賀源内

古人、春宵一刻價千金。」と高値につもれば、また浮世を三分五厘と捨て賣りにする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買ふたは、けもなく、三分五厘に賣りてしまふ出来合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまる所は、よくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは、人の心の定めなきなり。

(六々部集)

二鍾馗の畫賛

石川雅望

大臣と稱すれども、隨身舍人も従へず。降魔の靈劍ありながら、

石川雅望
六樹園・宿屋飯
盛等と號する。
江戸の人。國學
者。狂歌・狂文を
能くした。天保
元年(一四〇〇)歿、
年七十八。

平賀源内
名は國倫、號は
風來山人。本草
學者であつて又
戯作者。讃岐國
(香川縣)の人。
安永八年(一七九
九)歿、年五十七。
古人
宋の詩人蘇東
坡。二六頁頭註參
照。

鎮座せる社も見えず。顔に手足に朱をそそぎて、ぬき身をとつて



(筆崖芳野侍) 魁 鐘

振りまはす。もし生酔かと思てあれば、かしは餅を引窓から覗く。下戸か上戸か分くべからぬ文武兼備の進士の垂迹、げにちはやぶる紙幟、揚げばいよく、軒に高し。

鬼すまぬ我が大君の國なれば、鍾馗の劍のぬきがひもなし

(あづまなまり)

進士の垂迹

子耳藤
神ノ地河

徳富猪一郎

號は蘇峰。思想
評論家。貴族院
議員。東京日日
新聞社員。熊本
縣の人。文久三
年(一八六三)生。

一〇 風 雅 論

徳富猪一郎

唯かりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より彼方に聳ゆる山々の景色を眺めたるのみにても、風雅の感有る人と無き人とは、自ら其の興味を感ずる度を異にすべし。嗚呼、此の風雅の嗜みこそ、何人にもあり得べくして、又何人にもありたきものなれ。

世には風雅人とて、とかくに風雅といふことをば我が物とのみ思へる者あり。我が物と爲すは妨げずと雖も、之を我が専有物となさんとするに至りては、大いに不可なり。彼の世を避け、俗を脱して、山林に幽居し、花鳥風月をのみ友とする者、若しくは詩歌書畫茶の湯、挿花音楽の技藝に長じ、又は其等の鑑識に長じたるもの如き、此等とはもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも風雅の全權を専有し得べきものにはあらず。否、

やまゝ美し

風雅の嗜みは何人にもあり得べきものなり。
 凡そ其の境遇の如何に關せず、其の修養の多寡に係らず、すべて
 いかなる人といへども、其の優美の心を以て宇宙と人とに接する
 時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而し
 て風雅の嗜みは、恆に此の心を存して失ふことなからんことを努
 むるによりて生ず。されば、風雅は、必ずしも萬卷の書を読み破り、
 天地神人を究めたる學者にのみ存するにあらず。彼の眼に一丁
 字なき田夫野人と雖も、田畝の間に立ちて、春霞のたなびくひまよ
 り、遠山の端の夢の如く横たはれるを見て、いひ難き快感を其の胸
 裏に思ひ浮べたる刹那に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。風雅
 は又必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにあらず。彼
 の心なき賤の草刈といへども、其の背負へる草束の間に一朵の花
 を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ち亦風雅

の人たるなり。唯そこに必要なるは、此の心を恆に存して失はざ
 らんことを努むべきと、之を鍊磨修養して愈、其の眞醇に近からし
 むべきとの心掛のみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を珍畫名器の裏に置け
 ども、遂に風雅の眞味を解すること能はざる者あり。必ずしも又
 技藝に存せず。世には、詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音樂者と稱へ
 られて、却つて眞の俗物なる者あり。人もし風雅の嗜みあらば、其
 の境遇や、技藝や、もとより之を助くるに於て大なるべしと雖も、し
 かも、單に此等のみによりて、風雅は即ちこゝに在りと斷言すべき
 ものにあらず。彼の生田の森の激戦に梅花を簞に挿みて、自ら標
 識したる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。
 風雅の嗜みは人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の
 白きを看俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の

生田の森
 神戸市下山手通
 生田神社の境内
 に在る。

梶原景季
 父景時と共に頼
 朝の臣。正治二
 年(一一六〇)歿。
 三十九年

三三

心知る人は無きも
何れあらん
書讀む心は日月の如く
す

懷裡に投ずる感あり。一片の明月は何人といへどもよく之をながむることを得べく、また富者と貧者とを差別せざるなり。風雅は貴族的にもあり。しかも最も多く平民的に存す。而して吾等は此の風雅の嗜みを、平民社會に普及せしむることの、世道人心を正す上に於て最も必要なるを見る。

風雅の嗜みある者は自ら餘裕あり。かゝる人は議會討論の場中に於ても、尙よく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解せり。風雅の嗜みある者は自ら氣品あり。何となれば、利害得失の外に心目を快暢ならしむる天地を有すればなり。風雅の嗜みある者は、いかなる場合にも楽しみあり。何となれば、現在の齷齪たる社會の裡にありて、よく宇宙と人との美を我が心に吸収することを得ればなり。風雅の嗜みある者は、又よく自ら容忍することを得。何となれば、其の暗黒なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一

蓮月尼
太田垣蓮月尼
名は誠。愛兒及
び夫を失ひ尼と
なつた。和歌・
俳句をよくし
た。京都の人。
明治八年歿、年
八十五。

面を見ればなり。蓮月尼の歌にいはく、

宿かさぬ人のつらさを情にて
おぼる月夜の花の下ぶし

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。世には千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を抛ちて書畫を求めて、風流こゝにありと誇る者あり。若し其の人にして眞に風流を解し、且力よく之を致すは餘りあらば、我等は敢て之を斥けし。然れども其の人に於て、徒らに器物の末に志を勞して、單に其の多きを貪り、其の奇を誇らんとならば、吾等は之を指して玩物喪志の徒といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。之に反して、廢屋破窓のうち、新聞の挿畫を壁に挿み、今戸焼の茶碗にて盞茶を喫する人と雖も、其の心よくこゝに存せば、これ實に大なる風雅なるべきにあらずや。

(第二日曜講壇)

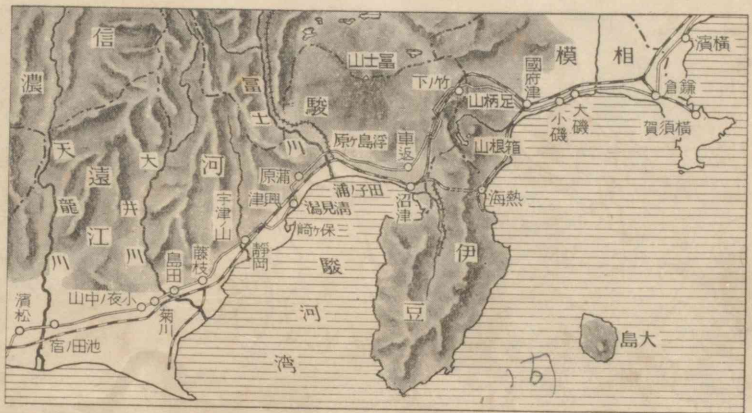
玩物喪志

今戸焼
東京市淺草區今
戸に産する陶器
の稱。

不破の關屋云々
「人住まぬ不破の
關屋の板びさし
荒れにしあとは
たゞ秋の風。」
（藤原良經、新
古今集）

鳴海鴻
「さよ千鳥聲こそ
近く鳴海鴻傾く
月に潮やみつら
む」
（藤原季能、新
古今集）

池田の宿
遠江國（静岡縣）
磐田郡、天龍川
の西岸に在る。
小夜の中山
遠江國（静岡縣）
小笠郡日坂の東
に在る坂嶺。



へば夜の間に、老蘇の森の下草に、駒を
とめてかへりみる。故郷を雲や隔つら
む。番場醒が井柏原不破の關屋は荒れ
はてて、なほもるものは秋の雨の、いつか
我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、
潮干に今や鳴海鴻、傾く月に道見えて、明
けぬ暮れぬと行く道の、末はいつくと遠
江濱名の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小
舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあは
れと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の
宿に着き給ふ。旅館の燈かすかにして、
鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川
を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路

菊水
昔南陽縣菊水、
汲下流而延齡。

西行法師
俗名は佐藤義
清、歌人、鳥羽
上皇の北面の武
士であつたが、武
出家して西行と
號した。建久元年
（一一九〇）歿、年
七十三。
命なりけり云々
一年たけてまた越
ゆべしと思ひき
や命なりけり小
夜の中山、（新
古今集）
菊川
遠江國（静岡縣）
榛原郡に在る。
承久の合戦
仲恭天皇の承久
三年（一一八八）
南陽縣云々
「南陽縣有甘
谷、谷中水甘美。
上有大菊、落
水從山流下、谷
中人家飲此水、
上壽百二三十、
其中百餘歲、七
八十者則爲夭。」
（風俗通）



菊川の宿

を埋み來て、そのことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法
師が「命なりけり。」と詠じつゝ、再び越え
し跡までも、うらやましくぞ思はれける。
隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に上れ
ば、餉進らする程とて、輿を庭前に昇き止
む。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿
の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と
答へければ、承久の合戦の時、院宣書きた
りし咎によつて、光親卿關東へ召下され
しが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、
汲下流而延齡。
今東海道菊川、
宿西岸而終命。
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやい

とゞまさりけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを菊川の

おなじ流れに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、葛楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下りしに、夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ



龍頭鶴首の船

龜山殿
京都市右京區嵯峨
峨今の天龍寺境内

島田・藤枝
駿河國(靜岡縣)
志太郡に在る

岡邊の眞葛云々
「歸り來る程はな
けれど朝露の岡
邊の眞葛うら枯
れにけり。」
(藤原爲家)
夢にも人に云々
「駿河なるうつつ
山邊のうつつに
も夢にも人にあ
はぬなりけり。」
(伊勢物語)

上なき思ひに云
云
「富士の嶺の煙は
なほぞ立ちのぼ
る上なきものは
おもひなりけ
り。」
(藤原家隆、新
古今集)

七月二十六日
後醍醐天皇の元
弘元年(一九一)

給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や浅き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれど、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。其の日やがて南條左衛門高直請取り奉りて、諏訪左衛門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手厳しく結うて、押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の十王の廳に渡されて、頸枷手枷を入れられ、罪の輕重を糺すらむも、かくやと思ひ知られたり。

清見瀉、浦風、寒き夜なく、は夢のやうさぬ波の關守
神ぬる、是路にかつは知りなからありた、田子のみづからさるる

太平記

尾崎紅葉

名は徳太郎。小説家。東京市の人。明治三十六年歿、年三十七。

西那須野の驛

栃木縣の北部に在る、東北本線の驛。

鹽 原

栃木縣北部の温泉地。

一三 鹽 原

尾 崎 紅 葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。

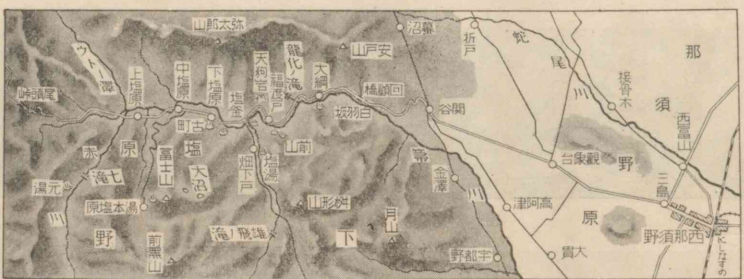
直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐に、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途一帯の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松をすぎ、進みて關谷村に至れば、人家のつくるところに、涼々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

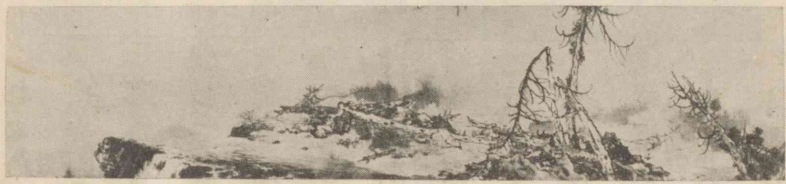
橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く、壘み、嵐氣冷やかに、壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花をひらき、愈、登れば、遙に木がくれの音のみ聞えし流

れの水は、浅く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、谷幽に蘚碧にして、幾條ともなく白絲を亂しかけたる細瀧、小瀧の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見すてがたし。

白羽阪を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯、猶數ふれば十二勝、十六名所、七不思議一々探り得べ

云この緒よりや云
一琴の音に峯の松
風かよふらし
いづれの緒より
しらべそめけ
む。一齋宮女御、拾
遺集





(山元春舉筆)

くもあらず。そもく、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流れに、浜る片岨にして、いたる處巉巖の水を挾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀑兒が淵、左鞞の嶮は古りて、白雲洞は朗らかに、布瀑龍が鼻材木石五色石船岩など眺めて行けば、鳥居戸前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の巖のところく、に咲き残りたる躑躅山藤など打眺めつゝ行くほどに、鹽釜の湯甘湯澤小太郎が淵など、早くもすぎで、いつしか畑下戸の里につきぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる積に臨めり。俯すれば水石の鄰々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ち來る流れは、二十丈の絶壁にかゝりて、素練を垂れたるごとき吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流れとの爲に、いく度か魂とび肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和らぎ、恍然としてすべ

て忘れたり。

まことによくこそわれは來つれ。何ぞ來る事の甚だ遅かりし、山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の暢けしといふも水の逝くにすぎざるのみ、牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、まづ侮らるべき愚かの者なれや。

見よく。木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、われはこゝに憂ひを忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞れを忘れて、かの雲と軽く、心はこの水と淡し。希くは今よりかくの如くにしてわが生を終へん哉。

(紅葉全集)

相馬御風

名は昌治。詩人。評論家。作家。新潟縣の人。明治十六年生。

一四 足跡

相馬御風

はるかなる海の果より

初夏の雲こそ起れ。

日は正午、磯には二人

旅人は袂わかちぬ。

西ひがし、砂につけ行く

足跡はつゞきて長し。

足跡はながくつゞけど

この二人いつかは遇はむ。

一すぢの砂の足跡

それとてもやがて消ぬべし。

旅人は笠あげもちて

やゝしばしかたみに呼ばふ。

はるかなる海のはてより

初夏の雲こそ起れ。

一五 深い心

得能文

得能文
文學博士。哲學
者。東京帝國大
學教授。富山縣
の人。

マーテルリンク
白耳義の文學
者。哲學者。劇
作家（西紀）六三
し。

ものゝふの云々
源實朝の歌。

浅い鍋は早く沸き立つ。深い思ひは言語に現れない。深い喜
びや深い悲しみには言葉が無い。言葉に現れるのは真に深いも
のではない。沈黙は深い印象を與へる。沈黙には深い意味があ
る。マーテルリンクが「蜂は暗黒裏に働き、思想は沈黙裏に働き、徳
は祕密裏に働く。」といったのは面白い語である。詩歌などに於
ても徒らに嬉しい又は悲しいといふよりも、却つてこれを露骨に
いひ現さないところに無限の情趣が味ははれる。例へば壯烈で
ある、跌宕であるとか感歎の語を發するよりも、ものゝふの矢並つく
るふ籠手のうへに霰たばしる那須の篠原。」といった方が遙に壯
大である。それと同じく、悲しいといはぬ處に真に深い悲しみが
あり、嬉しいといはぬ處に真に深い喜びがある。われらがソクラ

信 晦
屈 澁

テースや基督の運命に對して無限の感慨をいだくのはこのためである。

我等が深い心の奥底には、常に動いて止まぬものがある。この活動が鈍り、若しくは停る時に我等は語を發する。しかもこの活動の真相をその儘に發露することは困難である。されば、獨創的な深奥な思想家の書を読む時は、常に晦澁・信屈を感じる。このやうな思想家は出来るかぎりおのれの思想を現し、これを傳へようとするのであるが、無限の活動はこれを捕捉することが容易でない。それで種々様々にこれをいひ現さうと苦心する。そして讀者はその言葉を辿つてその思想を得ようとするのであるから、その眞實相に達することが困難なのである。既にいひ現されるれば動かなくなる。このいひ現された動かないものを再び整頓し、改めて排列すれば、平易明瞭ならしめることが出来る。これが即ち

△

紹 述

獨創的思索家の書よりも、その紹述者の書が比較的に解し易い所以である。これは深遠な思想の事のみではなく、我等の日常生活に於ても亦さうである。表面に現れた多くのことは、あり觸れたことで何の奇もないやうであるが、然しその奥底にはいひ現しがない深い活動があるのである。

奥の奥にある最も深いものは普通の意識ではなく、意識の奥底にあるものである。これが人格の核である、眞の我である。我等が深く思ひに沈む時は、眞の我が自らを見ようとするのである。我が我を見ようとする時には何の語もない。水中に魚籠ぎよぼつが跳れば水面に泡が浮ぶ。この泡が語である。そして跳るところが深いと泡は立たない。跳るところが水面に近ければ近い程、ますます多く泡が立つ。語の多いのは活動が浅い處に行はれる證據である。そして跳躍の形状によつて、泡の形状に種類があると同じ

く活動の様式によつて、語がそれに應じて現れる。語はその人を表す。かくて生きた沈黙は我等が深く自らの内に沈潜するのである。深く自らの内に沈んで自らを見る時に、我は具體的の全體に現れる。具體的のものは語で表されない。具體的の全體は生きて居る不斷の活動である、自由である。この活動は自らに法則を賦與する。それが理論的に働けば純粹思惟であり、實踐的に働けば實踐理性である。前者には學の基礎が立てられ、後者には道德の基礎が立てられる。自己が自己に與へた法則に従つて働けば善であり、働かなければ惡である。惡は消極的であり、働かないことであり、意志しないことであり、非有である。従つて善惡は事の成果に在るのではなく、ルーテルのいつたやうに、善事は善人を作らず、善人が善事をつくる。」のである。そして我が深く自ら省みて法則にそむいたと感ずる時に悔恨が起る。悔恨から罪の意

純粹思惟

唯心論

ルーテル

獨逸の人。宗教

改革を唱へた

人(西紀一四八三—

一五六一)

家々編註ナリキヤ
主張ニテ助ケル也

法悦

識が起る。然し深く沈潜しないときはこの意識は起らない。されば沈潜することの浅い人には罪の意識は無い。従つて自ら辯護しようとして試みる。こゝに於て語が多い。やがては不平を訴へる。自分ほど不幸なものはないともいふ。眞實に切實に不幸を感じるのは深く自ら省みた時である。即ち深い奥底が動いて居るのである。動いて居る時は語は無い。痛切な深い悲哀も、大歡喜の法悦も、共に語はない。しかも大地は震動する。

(淺人零語)

一六 樞園文抄

中島廣足

一 燕

いとうらゝかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめ

中島廣足

樞園又は田翁と

號した。國學者。

肥後國(熊本縣)

の人。文久四年

(一五三四)歿、年七

十三。

ひぢ

のこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁うつばりに巢くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ、鳴きさわぎたるさまこそ、いみじうあはれなれ。

二書

道々しき筋
何くれ
えうある事

夏の日の暮難きをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、ふみ見る心の楽しさになむありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家々にしるせる何くれのふみ、またかりそめの筆すさびなど、唐やまと、いにしへ今と、いとさまぐ、多かる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もてゆくまゝには、えうある事どもありて、かにかくに飽か

散りぼひ

ず面白く楽しきは、ふみにしく物またなかりけり。遠き世の見る程は、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となし、てうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなし事ども書きつくるが、たまぐも散りぼひ残りて後の世に傳はらば、今のいにしへを見るが如く、後の人はたわれを友とせむには、千歳の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。よろづの心やるわざいとさはなれど、たゞひとりゐて飽かず、楽しきは、ふみの外にまた何かはあらむ。「あるが上にもあらまほしきはふみなりけり。」と、鈴屋の翁の言はれたるは、げにさる事にこそ。

三 漁 村

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の風も、たまらぬ松かげなどに、たゞかりそめに作りたる藁屋

たよりなし

はかなげ
ものから

手がらみ

まぼり

さち多し

のゝしる

くゞつ

どものさま、浪うち寄せなば、やがて流れも失せぬべう、いとはかな
げに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかく、にをかききも
のから、さて住まひなば何心地かせましたと思ひやるだに心ぼそし。
夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが磯邊に立ちて、
「けふはいと遅くもあるかな。」などいひつゝ、沖の方をまぼりをり。
うまごどもにやあらん、まさごの上を走りありきつゝ遊びゐたる
に、入日さしたる島かげより、三つ二つ歸りくる舟の、かぢひき折り
てほこらしげなるを、老人待ちえ顔にうちほゝゑみたるは、さち多
かりしにやと見ゆ。渚に寄せて飛びおるゝまゝに綱くりよせな
ど、どかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出で来て、大きな籠
に魚ども取入れつゝ、になひもて行くさま、さはいへど賑ははしげ
なり。くゞつめくものもて来て、ちひさき魚三つ四つ乞ひもて行
く童などもあり。すべて人多く立ちこみさわぎて、舟のあたりか

あまのさへづり

四 山家の興

くさはひ

しがましく、さし寄りてのぞくべうもあらず。いと長き綱の渚に
かけ干したるを、くりためて取入れなど、やうくしづまりゆけば、
こなたかなた火ともしたるすき影、壁もあらはにて、いとあはれに
見ゆ。ひと夜宿りてみれば、波風の響枕をゆすりて、つゆまどろま
れず。曉方、隣の家々目さまして、なりはひのことどもなるべし、あ
やしう聞知らぬことどもを、おのがじし聲高にいひかはしたるげ
にあまのさへづり、めづらしうも、をかしうも。

山里のすまひは寂しきやうなれど、さるかたになれぬれば、なか
なかにをかしうなむ。さるは花もみぢの色香はさらなり、鳥蟲の
聲につけても、おのづから心を慰むるくさはひおほく、松のはしら、
竹のあみ戸、小柴がきゆひめぐらしなど、よろづのてうどさへいた

事そぐ

あるじまうけ
たかうな
かむ

そこはかとなく

住まで云々

「山深くさこそ心
はかよふとも住
まであはれはし
らむものかは。」

（西行法師、
新古今集）

よ小ほどの深く心を通し
自るが度深にその山奥に
まをりて、いづこもつゆの
と知らうか知る若しと
いふ

う事そぎて、庭などもたゞおのづからなるいはほのたゞずまひ、軒
近くしたゝる水をふる木のうつぼめく物にうけたためたる、飯炊ぐ
にも、手洗ふにも、唯この水にて事足りぬ。まれく、問ひくる人は
たあるじまうけなどいふ事もせず、わらびつくく、したかうなと
ころなどの、をりにしたがり所につけたるものして、手づからかめ
る白酒すゝめなどす。おなじき物語も人聞きはゝかるべき事し
なければ、心にのこす隈もなく、ゑひすゝみぬれば、やがてうち連
れつゝ、唯さながらなるうちとけ姿にて、そこはかとなくあくがれ
あるきなどするも、「住まであはれは」とか言ひけむやうに、またな
く心ゆきて、いのちも延ぶるやうになむ。

島木赤彦

本名は久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿。年五十

萬葉集

二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。仁徳天皇の頃から淳仁天皇の御宇に至るまで、約百三十年間の和歌が收められてゐる。

古今集

正しくは古今和歌集。二十卷。醍醐天皇の勅により紀貫之等延喜五年（一〇五五）に撰んだ歌集。

一七 民 謠

島木 赤彦

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅撰に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出されたもの

勅撰集時代

醍醐天皇の時勅
して古今和歌集
を撰せしめられ
た時から、後花
園天皇の時新續
古今集を撰せし
められた時ま
で、五百三十餘
年間をいふ。

神樂歌

神樂に合せて歌
ふ歌。

催馬樂

雅樂の一種。

で、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐることは、決して不自然ではない。このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を調べて見れば、容易になづくことが出来るのである。

篁分けば袖こそ破れぬ、利根川の石は踏むともいざ河原より。

しながどり猪名の湊に入る舟の、かちよくまかせ舟かたぶくな、若草の妹も乗せたり我も乗りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと

思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謠の系統は、足利徳川の各時代を経て、順次に發達推移して今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産み出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。乳が崎沖まで見送りましよが、それから先は神だのみ。

(伊豆大島)

の唄の如き、必ずしも船頭とばかりは言へぬが、海中の孤島に頼りなく住む人々の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹

乳が崎
大島の西北端。

浅間

長野縣と群馬縣との境に跨る活火山。海拔二五四二米。

追分

長野縣北佐久郡に在る町。もと中仙道と善光寺道との分岐點であつた。



碓氷峠

浅間山の南、群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境に在る。海拔約一〇〇〇米。

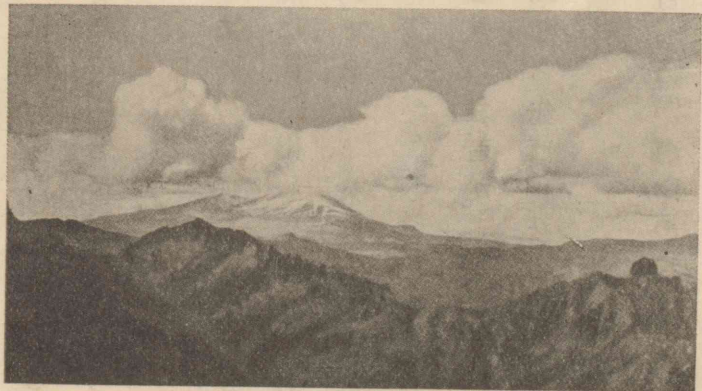
坂本

群馬縣碓氷郡に在る町。碓氷峠の東麓。

さを味はふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、浅間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。浅間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。その宿引の女が、旅人を呼びとめて、一宿を勧める心がこの唄の心である。一夜の宿を勧める歌謠を、勧められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分



山 間 浅

中仙道

東山道を経て江戸から京都へ行く街道。

輕井澤

長野縣北佐久郡東長倉村。避暑地として名高い。

人麿

柿本人麿。歌人。持統・文武の兩天皇に仕へた。傳未詳。

貫之

紀貫之。平安朝の歌人。古今集撰者の一人。天慶九年(天(906)歿、年六十五(一説)。

の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀れな漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いつも浅間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」はこの嶮坂を上下する脚絆草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れば親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁入して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これ等の唄はその生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謠としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謠ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出来ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謠に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生れ、「浅間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舎に生れてゐる事を考へ合せると、民謠と地方との關係を、ほゞ推測することが出来よう。たゞ、民謠の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發

生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて来る。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ。

と、唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まらずや、いなごや、きりすきすき葦のこやのうらに棲まらずや。

これは、伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌謠は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方



稻生澤村
静岡縣賀茂郡下
田町の近傍

の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心情を持つた民謠が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に唄はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか。」といふその心は、なんとといふ單純な、同情の籠つた、愛に満ちた心であらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の労働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗を取りあげて。」は、原作は勿論、この稻を刈りあげて。」であつて、それが苗取唄に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも残つてゐるが、唄の體から考へて、伊豆のものが最も原作

八ヶ嶽
長野縣と山梨縣との境に在る山。海拔約二八九九米。

の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越し三の坂越しや強清水。

これは信濃國の民謠中、出色の一つである。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

鴨長明
鎌倉時代の歌人。文學者。京都の人。建保四年(一一三二)歿。年六十四。

一八 ゆく川の流れ

鴨 長 明

一

ゆく川の流れは絶えずして、しかもこの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都のうちに棟を並べいらかを争へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古へ見し人は、二三十人がうちに僅に一人二人なり。あしたに死にゆふべに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また

安元三年
第八十代高倉天皇の御代(一一三二)

二

知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を争ひ去る様、言はば朝顔の露に異らず。あるは露落ちて花残り。残ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露なほ消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。

凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、稍たびくになりぬ。

去にし安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、靜ならざりし夜戌の時ばかり都の巽より火出で來て、乾に至る。果には朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなむ。吹き迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如

く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映してあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焰飛ぶが如くに

して、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心まごころあらむや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焰にまぐれて忽ちに死ぬ。あるはまた纔に身一つからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりなき。そのつひえいくそばく



ぞ。このたび公卿の家十六焼けたり。ましてその外は、數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際ゆかりを知らず。人の營み皆おろかなるなかに、さ

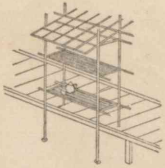
あぢきなし

しも危き京中の家を作るとて、實を費し心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三

こゝに六十の露消え方に及び、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿りを作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住家はをりくゝに狭し。その家の有様、世の常にも似ず。廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて繼目ごとにかねがねをかけた。もし心に適はぬことあらば、易く外へ移さむが爲なり。その改め造る時、いくばくの煩ひかある。積むところ、僅に二輛なり。車の力を報ゆる外には、更に他の用途いらす。

日野山
今京都市伏見區
木幡山の東北に
在る。



閻伽棚
普賢
釋迦如來に侍し
てその教を輔け
る菩薩。

不動

不動明王、又は
不動尊といふ五
大明王の一、大
日如來の化身。

往生要集

三卷。惠心僧都
(源信)の著。淨
土往生の要文を
集め、念佛歸依
をすすめたもの。

今日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさしいだし
て、竹の簀子を敷き、その西に閻伽棚をつくり、中には西の垣に添へ
て、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。か
の帳の扉に、普賢並に不動の像を掛けたり。北の障子の上に、小さ
き棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃、往生要集如
きの抄物を入れたり。傍らに箏琵琶各一張を立つ。いはゆる折
箏、繼琵琶これなり。
東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。
東の壁に窓を開けて、こゝに文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。
これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらな
る姫垣を圍ひて園とす。即ちもろくの藥草を植ゑたり。假の
庵のありさまかくの如し。
その處のさまをいはば、南に筧あり。岩を疊みて水をためたり。

正木のかづら



跡の白波云々
一世の中を何にた
へむ朝ぼらけ
は恰も朝澤や
行く舟の跡
まづ白波を
ちもりた

岡の屋
山城國(京都府)
紀伊郡宇治川の
東岸に在る。
滿沙彌
俗名
笠麻呂。奈良
朝、元正帝の時
代の人。
白樂天の琵琶行
脚の古蹟。支那
江西省九江府德
化縣に在る。
源都督
桂大納言源經
信。琵琶の名手。
承徳元年(七三七)
歿。年八十二。
秋風の樂
琵琶の曲。盤涉

林、軒近ければ爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木
のかづら跡を埋めり。谷茂けれど西は晴れたり、觀念の便りなき
にしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西方にほ
ふ。夏は杜鵑を聞く。かたらふごとくに死出の山路を契る。秋は
蛸の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む
積り消ゆる様罪障に譬へつべし。もし念佛もの憂く、讀經まめな
らざる時は、みづから休み、みづから怠るに妨ぐる人もなく、又恥づ
べき友も無し。ことさらに無言をせざれども、一人居れば口業を
修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何
につけてか破らむ。若し跡の白波にこの身を寄するあしたには、
岡の屋に往き交ふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の
風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督のながれをな
らふ。もしあまりの興あれば、しばく松の響に秋風の樂をたぐ

阿佛尼

藤原為家の妻。歌人。鎌倉時代の人。没年未詳。十六夜日記。阿佛尼の京都から鎌倉へ下つた時の日記。壁の中より云々。古文孝經をさす。

一九 十六夜日記抄

阿佛尼

昔壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすくも書き置くあと、たしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬまつりごとにももれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと、思ひ知りながら、又、さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくればやまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと、思ふ人もやあらむ。ひのもとの國に、あまの岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなり、にけるとぞ、この道のひじりた

二度勅をうけて

新家撰
新古今集
新勅撰集
為家撰
續後撰集
續古今集
二人の男の兒
為相
為守
細川
播磨國(兵庫縣)
細川の庄。

ちは記しおかれたりける。

さて又集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて代々に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけむ。そのあとにしも、たづさはりて、二人の男の兒ども、ちの歌のふる反故どもを、いかなる縁かありけむ、預りもたることあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、故なく、せきとめられしかば、あととふのりのともし火も、道を守り、家をたすけむ親子のいのちも、もるともにきえをあらそふ年月を経て、危く心細きものから、何として、つれなくけふまではながらふらむ。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらむかたなく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさば、くもらぬかげもやあら

人の親の心は、
一人の親の心は、
みにあらねども
子を思ふ道にま
どひぬるかな。
藤原兼輔、後
撰集、
ふたりに心か
ふたりに心か

はるゝと、せめておもひあまりて、よろづの憚りをわすれ、身を益なきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

頃はみ冬たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとてとままるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍従大夫などのあながちに打屈したるさまいとこゝろぐるしければ、さまざまいひこしらへつ。

代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだならぬかぎりを与へりしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書き添へたる歌

人やりならぬ云
「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りこむ。」
(源實、古今集)

侍従
爲相
大夫
爲守

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草

これを昔のかたみとも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥

ひとかたならぬ跡を思はば

これを見て侍従のかへりごといと疾く有り。

遂によもあだにはならじ藻鹽草

かたみを三代の跡に残せば

迷はまし教へざりせば濱千鳥

ひとかたならぬ跡をそれとも

このかへりごととおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせたてまつりたくて、又うちしほたれぬ。

(十六夜日記)

北村透谷
名は門太郎。創
作家。評論家。詩
人。神奈川県
人。明治二十七
年歿、年二十七。

二〇 山庵雜記

北村 透谷

卓犖不羈

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於てよりも、
默居冥坐する時に於て、燦爛たる光明を發する事多し。心中の文
章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を
裝はんとするは、文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往々に
して文章を事とするを喜ばず、文字の賊とならんよりも心中の文
章に甘んじたればならん。

寤寐の間
意無意の際

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、おもひは意無意の際に
ある時、一鳥の聲を聴けば、忽として我天涯に遊び、忽として我塵界
に落つるの感あり。我に返りて後、其の聲を味はへば、凡常の野雀
のみ。然るに我が得たる幽趣は、地に就けるものならず。こゝに
於て私に思ふ、感應我を主として他を主とせざるを。

幽趣

バイロン
イギリスの詩人
(西紀)天六十一三
(四)。

頃者
駁撃
是非曲直

世にあり難き至實は涙なるべし。涙なくては情もなかるらん。
涙なくては誠もなかるらん。狂ひに狂ひしバイロンにとりては、
涙は細繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのも
のを繋ぎ止むるは、此の實なるべし。人世涙あるは原頭に水ある
が如し。世間若し涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて、主
宰とすることあらば、痛く悲しきことは跡を絶つに庶幾からんか。
他を議せんとする時、尤も多く己の非を悟る。頃者激する所あ
りて、生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し終りて靜に内省す
るに、人を難ずるの筆は、同じく己を難せんとするに似たり。是非
曲直輕々しく判じ難し。如かず、修練鍛磨して、妄に他人の非を測
らざることをつとめんに。

(透谷全集)

二 社會と感激

中澤 臨川

中澤臨川
名は重雄。工學
士。文學者。長
野縣の人。大正
九年歿、年四十
三。

一日一刻感激がなければ、その社會は遲滯する。感激のない社會は、丁度水の死んだ沼のやうなもので、ぼうふら子子のわき、枯葉の腐るに任せるほかはない。生命の源から湧き出す活泉の斷えた社會程、慘めなものなからう。「いつそのこと太く短くこの世を送りたい。」といふやうな嘆きは、感激のない社會に生存する者の、自然に洩す倦怠の聲である。社會は一種の大きな自動機械で、誰をでもその因習と機械律のもとに囚へ搬ばうとする。多くの人は、この社會の壓制に馴れて、無自覺に、一瞬の自由をも知らずに、「自我」の面影を見る機會もなくして、醉生夢死する。一人感激を欲し自由を希ふ者があつても、その人の力の餘程偉大でない限りは、彼も亦終には、重い軛くみきを身に負はされて、同一の運命に終らざるを得ない。人

は生命の感激に生き、人は社會の因習に死ぬ。

感激に生きる者の一刻は、いかなる富貴を以てしても代へ得ない程貴いものである。藝術家や宗教家の生活が、能く之を證明してゐる。陋巷に窮死する名匠の一生を憐む者は、憐む者が愚である。人は、世間並に立派だと思はれる生活をして、他ひとも羨み、自分も満足してゐながら、ある動機から、急に從前の生活が虚偽の塊であつたことに氣の附くことがある。昔、アレキサンダー・セヴェラスの時代に、羅馬に一人の男があつた。彼は伶俐な工匠であつた爲に、その名譽は揚り、その財囊は常に満ちてゐた。彼は楽しい家庭に住ひ、愉快な交際社會へも出入した。彼は、日毎満足の朝に目覺めては、楽しく忙せはしい仕事を迎へた。これ程安泰な生活が、またと世にあらうか。然るに一日、或不安が彼の心を襲うた。彼は急に宗教上の狂熱に捉へられた。生命の嵐が、落着き拂つた羅馬の街

アレキサンダ
ー・セヴェラス
ローマ皇帝マル
クス・アウレリ
ウスのこと（西
紀二五三—二五五）。

街を吹き捲つて、その姿を一變させたやうに彼には思はれた。古い帝王の都は、その一つの塵の位置をだに變へないのであつて、變つたのは唯、一住民の心であつた。その日から、彼の眼に映るあらゆる事物が、新しい意味を彼に齎して、彼自身が奇蹟と法悦の中心であるかに見えた。彼は、長く囚はれてゐた皮相な社會的生活の満足から遁れて、斷えざる感激の新生命に入つたのであつた。

誰が彼を羨んだであらう。恐らく當時の人は、その後の彼の行狀を笑つたに違ひない。それほど社會的慣習と惰性とは、世間の人心に喰ひ入つて、彼等の感覺を鈍らせ、彼等の魂に目隠しを施してゐるのである。然し、その癖彼等は、無意識の間に何等かの感激を待ち焦れてゐる。彼等は、且疑ひ且恐れながら、生命の慈雨を望んでゐる。社會的因襲の牢獄は、長く彼等の耐へ得る所でない。そこで、或者は感激の恵みを宗教に求め、或者はこれを藝術に求め、

撞着

或者はこれを直接行動に求めようとする。求めて得ざる者の墮落は悲惨であつて、これ實に社會の日々行ひつゝある罪惡である。生命の源に遡り、感激の泉を汲まうとするのは、人性の常である。然るに、社會が之を阻止する。社會は、廣い生命の爲の方便でなければならぬにも拘らず、生命の直接要求と社會との間には、常に何等かの間隙があり撞着がある。感激を阻止する社會は最も悪い社會であり、共同的感激のない社會ほど住むに値しない社會はない。私は安愜な生活の百年よりも、むしろ感激の生活の一日の貴さを想見せざるを得ない。私は、我が邦の維新前後に遭遇した人達の幸福を常に羨むものである。我等の自由性は必ずしも身體財産の安全を以て満足し得られるものではない。我等は、高潮した感激に由つてのみ求め得らるゝ眞自我の自由を欲する。重ねて言ふ、感激のない社會ほど悪い社會はない。

(破壊と建設)

高山樗牛
名は林次郎。文
學博士。文藝批
評家。山形縣の
人。明治三十五
年歿、年三十二。

伽毘羅國

三 世界の四聖

一 而拾可

高山 樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテースキリストの四人、世呼んで世界の四聖とたゞふるは宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ五百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦身は一國の太子に生れけれども、夙に思ひを人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして

元々

木鐸



釋迦

跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹て相争ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年

大司寇
支那周代の官名

孔子の事
孔子は魯に生れ、幼くして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。



孔子
子なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に

當時の支那はいはゆる春秋戰國

陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

何ぞ夫子を知るもの云々
論語、憲問第十四にある。

道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。と。門弟子貢慰めていはく、何ぞ夫子を知るものなからんや。孔子答へていはく、天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。と。後幾ばくもなくして歿す。時に七十三。

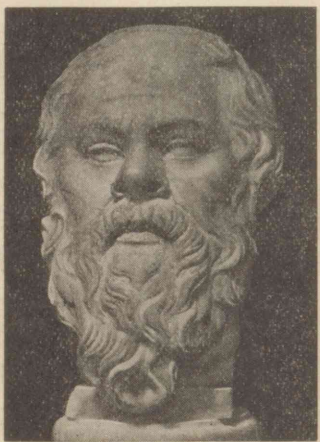
ソクラテースはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子

跋扈

侃諤の正義

なり。その生れたるはおよそ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年をへだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争ひに止り、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。その状なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず。侃諤の正義その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの、相計りて國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはいはく、「ソクラテースは國教を信

傲慢不遜

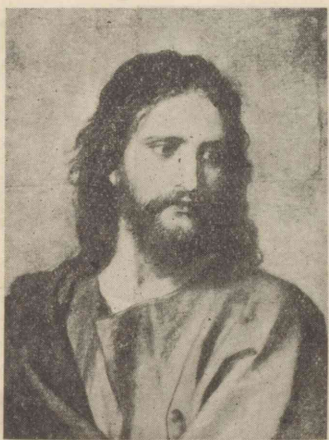


ソクラテース

ぜずして異教を翹め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へていはく、「予はただ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に従容として毒を仰いで歿す。

アスクレピアスの神
ギリシヤの醫藥の神。

將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースはいはく、「爾一鶏を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。



キリスト

キリストは本名をヤソといふ。キリストとは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。西曆紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、ユダヤの各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして、その福音を傳へた

り。

抑、當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して、益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出して、この暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等はこれを喜ばず、以て猥に新法異説を唱へて、民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜に祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲

すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に
 哀哭する女子を顧みていはく、エルサレムの女子よ、吾が爲に哭く
 こと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と、かくの如くしてキ
 リストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キ
 リストの死後、その弟子は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下
 に弘む。キリスト教即ちこれなり。

二

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、
 永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除き
 ては、いづれも轆軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四
 方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテ
 ースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は

轆軻不遇
 と、
 又、
 軻にちるゝ

このまゝ

盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘澹たりと謂ふべし。
 然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍
 福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にそ
 の死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の
 不幸を憂へずして、却つて、「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世
 に見えんや。」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位と
 を抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇う
 て、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するもの
 ぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷ひを
 さまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陥るゝものの爲
 に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。
 四聖はその生れたる所と時とを異にす。故にその教理にも亦
 多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

涅槃

三世

現世

五常
仁義礼智信

身すでに修らば
云々
大學に述べてある辭

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ
 人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死いづれか苦に非ざるべ
 き。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原
 因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執着するに在り。故に
 吾人は「我」の一念を脱却して、無我無心の境界に達せざるべからず。
 これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにするに
 在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。
 君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。
 人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質により
 て、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於て
 あり。すでに教育を受けて、身すでに修らば、家自ら齊ふべく、家
 齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故

に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見る
 を得べし。

ソクラテースの教はいはゆる知徳合一説なり。思へらく、真正
 の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知
 つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識道
 徳の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の
 義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の満足
 なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故
 に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德
 は富貴の爲に存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓
 は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。い
 はく、心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。

悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ
 渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べ
 ればなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければな
 り。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。
 悪に敵することなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも
 めぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。
 人に見せんがために義をその前に行ふこと勿れ。右の手の爲す
 ところを左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと
 勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は、顯はに報い給ふべければなり。
 人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。
 人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木うづぼりを見ざる。汝
 等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば
 啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これ

に入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る門は窄く、その路はほ
 そく、これをうるものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふもの
 は、磐の上に家建てたる智者の如く、聴けども、行はざるものは、沙上
 に屋を架せる愚人の如し。と。キリスト教の精髓は、後世の人の
 かなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝い
 てすでに幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣ある
 を見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を
 養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者な
 りと謂ふべし。その遺徳の高大なること何を以てかこれに比せ
 んや。

(樗牛全集)

和辻哲郎

文學博士、哲學者、東京帝國大學教授、兵庫縣の人。明治二十二年生。

二三 心と言葉

和辻 哲郎

心と心とを觸れあはせるには、言葉だけに頼ることは出来ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて来る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異つた方向に刺戟を受けることは珍しくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奥にちこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神経と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が産みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこたはりもなくすなほに向うへ通ずることもある。時には、その言葉の必要さへ

ない。それが、言葉の上の詳しい説明や了解を必要とするはずの場合においてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることは出来ぬといひきるわけにはゆかない。しかしまた、言葉で説明しさへすれば、心は通ずるものだといひきることも出来ぬ。

心を通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲に對して、非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確にいふことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられてゆく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相手

の行爲を不正と判断しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決してゆくものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。常人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することは出来ない。彼が道德的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に頼つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押詰められても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて来るはずはないのである。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遂に強い刺戟を彼に與へるのである。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告のうち同情を感じずして、たゞ征服慾を感じるのであるならば、忠告者の心は、終に相手の心に觸れることが出来ないであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを説明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或心の状態を現す言葉は、複雑な組織を土臺として現れて来る。だから同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異なるに隨つて、それぞれに異つた色調や倍音を伴ふ。言葉を通して、その背にある人格がにじみ出し、ひゞき出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集積によつては、些もふかめられるものでない。たゞ正直に、その人の

築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうに輒たやくは同一であることが出来ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の内容に、或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ることもしくはそれ以上に深い眞理を語ることは、二十世紀の今日では極めて容易である。と考へてゐる人が、我々の眼前にいかにも多いことであらう。しかしまだ何人も、キリストの如き力と愛とをその言葉からひき出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奥にひそむ心である。

(偶像再興)

二四 將來の日本

鹿子木員信

鹿子木員信
文學博士。哲學
者。九州帝國大
學教授。熊本縣
の人。明治十七
年生。

恐らくは日本國ほど將來の偉大を約束された國は、他に多くは
あるまい。蓋し、今日の日本は、もはや單なる島國、純粹なる海國で
はない。それは、その版圖たる朝鮮とその租借地たる關東州によ
つて、大陸的國家となつたからである。しかも我等の活躍の奥に
擴がるその大陸は、世界最大の歐亞大陸だ。それは亞細亞大陸ばか
りではない。實にシベリヤを経て歐羅巴大陸に續く大陸である。
鐵路フランスのパリよりバイカル湖畔に至るまで、殆どトンネ
ル一つなき連續せる平野である。ウラルの山脈は、唯少しく持上
つた丘陵に過ぎない。バイカル湖畔に至つて、始めてその岬角を
迂曲するために、僅ばかりのトンネルを潛るのみだ。而してバイ
カル湖を後ろにし、興安嶺の低い、なだらかな丘陵を過ぐれば、再び

朝鮮國境近くまで打續く平々坦々の滿洲の沃野千里である。この世界最大の大陸である歐亞大陸に連る、日本帝國の中央部であり、又その核心である日本諸島の面するところは、實に世界に於ける最大の海洋である太平洋だ。而して太平洋の彼岸は、即ち

南北アメリカ大陸だ。換言すれば、日本帝國は、實に以て一般に國民を偉大ならしむる要素、ラッチェルの所謂國民偉大の源泉である海洋、しかも日本の場合においては、世界最大の海洋に浴し、この海より得る寶を以て、泰山の安きに置き得る大陸を有してゐるのである。かくの如き偉大たり得



ラッセル
獨逸の地理學者
(西紀一八四一—一九〇四)



べきすべての要件を具へて、しかも、尙將來日本國に何等見るべき偉業と、雄渾なる文化とがなしとするならば、それは日本國土の罪でなく、無論、日本國土を我等に賜うた神々の責任でもなく、明らかに我が日本國民の懦弱低能のしからしむるところでなければならぬ。

若し、世界において、日本國以外に、日本とほゞ同様の形勝の地位を占むる國ありとすれば、それは英國であらう。しかもその英國は、昔よりその對岸に、スペイン・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・デンマーク等、その人口において、その富と文化の程度とにおいて、何

拮抗

れも英國と雁行し拮抗するところの強國文化國を控へてゐたのである。然るに我等の日本國の場合においては、西北に向つては、殆ど無人といつて好いシベリヤの曠野が無限に開けてゐるのである。我は人口の過剰に悩んでゐるのに、彼は人口の稀薄に苦しんでゐるのだ。しかもその地は、たゞ嚴冬の互寒といふ一點を除いては、極めて良き健康地帯であり、その地上地下は、未だ開發されざる無限の資源を藏してゐるのである。而して我が二千年來の隣邦支那の現状は、國內の紛争に寧日なく、何時その秩序統制を恢復し得べしとも見えぬ。退いて深くこれ等の事實を綜合し、玩味して見よ。鋭き靈覺ある者は、日本國將來の雄渾なる可能性が、彷彿としてその心眼の前に湧き立ち來るのを禁じ得ないであらう。然るに、翻つて思ふに、世界史上における日本の可能性は、これ取りも直さず、我等日本國民に課せられたる天與の課題、實に我等當

互寒

退嬰自屈
苟安

空疎

面の天與の事業に外ならぬ。従つて、進んでこの天與の課題の解決に努めんとせず、却つて躊躇逡巡退嬰自屈、たゞ目前の苟安を求むるにのみ汲々たることは、日本國民自らその日本國民たるの意義と使命とを抛棄し、自らをやがては來る亡滅の手にゆだねることである。然らば生き且勝たんがためには、我等は何を爲すべきか。我等の仕事は、その事業の大であればあるほど、多岐多様萬端であることはいふまでもない。たゞ若し、この際我等の心構への根本的なるべきものを取出して語るを許さるゝならば、それは恐らくは次の如くであらう。

精神的には、我等は先づ、空疎皮相淺薄なる歐米追隨の風を止めねばならぬ。寧ろ去つて、深く日本精神の歴史的經驗に沈潛し、そこに我等の心を、我等自らの過ぎし勝れし文化によつて培ひはぐくみ、養ひ育てて、具體的に、即ち眞實に世界文化なるものに眼ざめ

なければならぬ。

一度我等の心にして、日本文化に培はれて、世界文化なるものに参到する時、我等の心は、もはや世界文化を自覺せる心である。而して一度眞に世界文化を自覺せる心を以て、西歐の文化に對する時、西歐の文化は、今までとは全然異つた深き内容を持つ崇高なる姿となつて、我等の前に現れ來るであらう。その時西歐の文化は、もはや單なる機械的物質的文明ではなく、その機械的なるものさへも、實は、ある獨特な深遠な心構への生むところであることを知るであらう。而してこの時始めて、實はこの「西洋機械之術」をも、盡すことが出来るのである。

小楠流に、單に「堯舜孔子之道」を明らかにしてゐただけでは、百年の學習もなほよく機械之術を盡すことを得ないで、常に西洋の足跡を追ふのみでなく、遂にはその後塵を拜するに終始するであら

小楠

本名は横井時存。小楠はその號。熊本縣の人。維新の功臣。明治二年歿。年六十。

後塵を拜す

うと思はれる。西歐の文化を物心兩面に互つて把握し得る者は、たゞ全體としての文化に沈潜参到する者のみである。而して、歐米文化との接觸交渉の今日の如く盛んなる日本にあつて、進むべき道は唯一つ——徹底的に而して全體として、西歐の文化を了得するにある。この了得の上に、彼我文化のより高き綜合に向つて精進することにある。

而して經濟的・政治的には、前に指摘した如き當面の事實の大膽なる直視と、その事實を生む課題に對しての勇敢なる解決の努力こそ、我等の指針たるべきものである。年々五十萬乃至七十萬の人口増加は、退嬰無爲を事とする人々に取つては、或は極めて厄介なる事實であるかも知れぬ。しかも、我等は、この事實より面を背くべきでない。寧ろ生存の必要に直面して、内には國民的生活様式を改善することによつて、これを單純・簡易・堅固なるものたらし

め、外には國家發展の鐵則を明視して、その認識の上に、適確なる事實に基づき、細心大膽なる國策を樹立すべきである。今日世に行はるゝ思想は、我等の見るところを以てすれば、悉く一日の苟安を貪るなまけ者の欲求か、然らざれば、たゞ空しき俗論時流に投じて、事實客觀の問題のいづこに存するかを知らぬ空疎なる事大主義者の空論としか見えぬ。我等は一日も早く、この風潮を一掃して、再び我が日本國をして認識適確、勤勞健闘の國家たらしめねばならぬ。

〔やまと〕ころと獨逸精神―大正十五年作〕

時代の概観

二五 近世明治の文學

一近世

上古の和歌に發して中古の物語となり、近古の軍記物語となり、更に謠曲となれるは、上古より近古までの國文學變遷の大綱にして、抒情詩より敘事詩、敘事詩より劇詩となれる順路を經過し來れり。但し之を繼承し、之を完成して、あらゆる方面の發達進歩を示したるものは即ち近世文學に在り。徳川の昌平三百年は、文學の發達進歩には最も幸運なる時代なりき。

中古の國文學は宮媛より出で、近古の國文學は公家と僧徒との手に成れり。近世に入りては、學問は次第に僧徒の手を離れ、別に儒者の一階級を生じ、又儒學者に對して起れる國學者あり。孰れも地下人にして堂上人に非ず。文學草莽に墜ちて、自由研究盛ん

儒學の獎勵

に、近古時代の弊竇たりし祕事祕傳を貴ぶ風は次第に解除せられ、官職・家格にこそ上下の階級は嚴重なれ、學問の門戸は何人にも開放せられ、知識の堂奥は何人の登昇をも拒まざるに至れり。茲に於て争うて新説を鼓吹し、強ちに師説に泥まず、獨斷的方法を棄て、學術的研究の態度を取るに至りしかば、一般學術の進歩大いに見るべきものあり。純文學も亦之に伴ひて其の發達をなせり。印刷術の進歩が、其の背後の大勢力たりしは言を待たず。徳川幕府は儒教を獎勵して武士の修養に資し、經史に通ずるものを爲政家として登庸せり。是に於て文教大いに興り、碩學鴻儒相踵いで世に出でたり。是等儒學者の假名を交へて筆述せる所謂和漢混淆文は、即ち法を漢文に採り、漢語及び漢文訓讀の法を國文に加入せるものにして、即ち今の普通文の基礎を成せり。貝原益軒・新井白石・荻生徂徠・室鳩巢等、或は隨筆に或は論説に、若しくは

國學の興起

紀行に若しくは傳記に記す所同じからず、文體一樣ならざれども、平易暢達、概ね近體文の模範となすに足る。

漢學者が、支那の古文明に憧憬するに慊焉たらず、日本自ら日本の道ありと稱して、學問文章に日本の長所を發揮せんとしたるものは國學者なり。漢學者が漢文を作爲せるが如く、國學者は、中古以上の純國語を以て文を綴り、歌を賦し、只管我が國の古代を理想とす。賀茂眞淵・本居宣長・村田春海・橘千蔭等、苟も古學派の流れを酌めるものにして、國學者を以て自ら任ぜるものは、法制制度の専門家たると、言語文法の學者たるとを論ぜず、必ず雅文を作り、和歌を賦し得ざるものなし。國學者はかくして漢學者の漢文・漢詩に對抗したれども、其の擬古文と稱するもの、句章の排列・引喩の方法等、實は知らず識らず當時の漢文に負ふ所尠からず。

和歌の革新

和歌に於ても、亦徳川時代に於ては一革新を見るを得たり。い

はれなき祕事祕傳の束縛は、早くも地下國學者の嘲笑する所となり、學術的論斷の前には論抗する能はず。地下の國學者は何等の掣肘を受けず、束縛を蒙らずして、自由に詠歌をすさびとせり。其の初は堂上家に學びし京都の地下人中にも、後には出藍の才を發揮して、優に堂上家を凌ぐものあり。世下るに隨ひて、作家益多く、私集續出せり。之を近古以來の沈滞眠れるが如きに比すれば、其の懸隔如何ぞや。

雅文和歌の進歩は、近世文學史上の一大偉觀たるを失はざれども、要するに模倣文學なり、復古文學なり。學問興隆の結果として、學者の間に起れる文學にして、一般庶民の文學に非ず。堂上の文學は地下に委し、僧侶の學問は俗人に移りたれども、文教は尙士流以上に限られたり。然るに都市の發達、財貨の増殖に伴ひ、平民社會の勃興は、隱然として其の勢力を成し、文藝の方面に於ても、活躍

平民文學

俳句

せる發達を認むるに至れり。彼の近古文學を繼承して更に之を大成せる新文學は、皆此の平民社會の勃興を表彰するものならざるはなし。俳句、川柳、狂歌、狂文より小説、淨瑠璃、脚本の類も、とより教育少く趣味低き社會の嗜好に投ずるものとして、間、猥雜鄙陋なるもの無きに非ざれども、文學としての生命は、其の中に活動せり。十七字の俳句は、詩形としては世界の文學中恐らくは最も短簡なるものなるべし。然れども其の詩界は和歌よりも甚だ廣大なりといふを得べし。何となれば、和歌の用語は已に古語に限られたるに、吟詠の範圍亦春花秋月、古人の題詠以上に出づる能はざれども、俳句の用語は漢語と俗語とを選ばず、古語と今語とを問はず、要は之を詩化して用ふれば可なり。又其の吟詠する主題も、必ずしも古の大宮人の見そなはしけん物には限らず、如何なる市井裏店の事物をも捕捉し來るを厭はざればなり。唯其の句形の短き、

物の急所を捕へざるべからず、象徴を示さざるべからず、不言にして語り、言外に餘韻無からしめざるべからず。修辭上より見んか、冗長優美に流れ易き國語をして、出来るだけ緊縮せしめたるものにして、連歌以來幾數回の陶冶を経て洗煉せられたる句法の茲に到達せるものにして、技巧の最も進歩せるものなりといはざるべからず。然れども其の最短簡の極なる言語を以てして、多大の意味を髣髴たらしむるを得るは、和歌の約束を利用したるが爲に外ならず。古來の和歌の約束は物語となり、謠曲となり、常に吾人に親しめり。其の一語は早く吾等に向つて詩的の感を與ふ。俳句は之を利用して其の句の効果を成すことを得るなり。俳句には必ず季無かるべからず。季に於て人事と自然とを結合す。上古以來の和歌は自然と人事との融合を忘れず。其の約束は十七字の中に緊縮せられて、吾人はこゝに其の結晶物を見るに至れるなり。

俳文

狂文

俳人の吟詠するに方りて材料とする人事自然古今雅俗の別なく、縦横に其の感懷を排列して文を成せるものは即ち俳文なり。枕草子を中古歌人の主觀に映じたる隨筆文とすれば、俳文は俳人としての主觀に映じたる一切を隨筆して其の興を遣れるものといはんか。古人が一の句題を得て數百句を得るとせんに、そは皆記憶を本とし、經驗を本とし、想像再現の作用によるものとせば、此の想像再現作用の箇々分立せるものは俳句を成し、同時に聯結せるものは俳文を成すといふべし。

狂文は俳文に似て非なり。俳家者流は雅俗を別たさず、階級を無視して、自ら世外に超然たる風あるを以て、一種飄逸の氣風あり。狂文の取材の古今に互り、雅俗に跨るは似たれども、尙稍、世俗に落ちたる觀あり。恰も其の名の如く、普通文の常規を脱し、卑俗を厭

狂歌

はずして、古文に言ひ得べからざる思想を古文の形によりて言ひ現したるものなり。大體に於て古文のモヂリといふべきものなり。故に滑稽可笑を主として、超然洒脫の趣なし。其の發達の俳文に負ふ所多かりしも疑ふべからず。

狂歌も亦和歌の流行と共に行はれたり。古歌の用語句法を用ひて、世俗の事柄を吟詠する上に其の滑稽を構成するなり。莊重なるべきものの卑俗化せられ、眞率なるべきものの戲笑の資に供せらるゝがをかしきなり。狂歌の趣味は、和歌ありて始めて存するなり。

前句附と稱して、かねて下の十四字を定め置きて、之に相應する上句十七字を作らしむるは、一種狂歌の戲なり。其の前句は遂に獨立して川柳となれり。文雅風流の士の間に行はれずして、市井間の遊戲に出で、ひたすら機智頓才を競ひたるものなりき。故に

川柳

自然の景色を詠出することなくして、日常社會の人事を材料とし、其の形の短簡なるは最も譏刺に適せるを以て、遂に専ら世俗人情の弱點を譏笑するを目的とするに至れり。川柳點の穿ち即ち是なり。俳句も亦間、滑稽洒脫のものあれども、俳句は必ず自然を伴はざるべからず。川柳は自然景の聯合を要せず、鋭敏なる觀察、機警なる單語、寸鐵人を殺すの概あり。江戸っ子の機敏頓智と樂天洒落の性質とを反映せるものといふべし。凡そ狂歌といひ、狂文といひ、川柳といふ、皆江戸の地に發生せるものにして、以て昌平日久しき逸民のすさびを見るべきなり。

敘事詩の方面に於ては、初期に於て早く信長記、太閤記等の軍書出でしが、後假名草子と稱するもの流行せり。佛教、儒教の教訓を含むこと多きは、近古時代の文學と相遠からず。文辭、脚色尙新奇と稱すべきもの無かりしかども、中には支那の怪談、傳説等を翻譯

し來れるあり。小説界一般を貫通せる教訓主義と、支那小説の翻案主義とは、早く其の傾向を認め得べきものあり。碩儒多く輩出し、一般文藝の勃興せる元祿時代は、小説界に於ても西鶴を出せり。西鶴はもと俳人にして、輕妙洒落なる筆致と鋭敏犀利なる觀察とを以て、次第に淫靡に流れたる社會の半面を寫し、文辭着想共に一機軸を出せり。西鶴の作は寧ろ人生の隱微なる裏面を忌憚なく暴露したるものにして、道義のやかましき時世に、淫猥なる言辭を敢てして毫も遠慮せざるは、俳人の不羈洒落なる襟懷を見るべしといへども、要するに淫靡の語を列ねて淫靡の俗に投じ、讀者の心を挑發して其の書を沾らんとしたるに過ぎず。唯其の文辭の妙に至りては、中古文の典型に據らず、近古文の常套に陥らず、推敲精鍊の造句に習熟せし俳人の、其の才を社會描寫の敘事文に應用せるを見る。故に其の小説も、亦全篇を通じて脚色ある小説に非ず

して、幾多片々たる小話の集合に過ぎず。若し此の一小話を一句と見れば、全篇は即ち連歌の如し。西鶴の連句を見れば、人事を詠出せるもの多く、其の小説は其の連句を擴張せしに外ならざるを知る。西鶴の流れを酌めるものに、自笑其積の書ける八文字舎本あり。世西鶴の書と併せて浮世草子といふ。是等は皆京阪地方に發生せる文學とす。

赤本といひ、黒本といひ、青本といひ、黄表紙の類、片々たる遊戲文學は未だ平民文學の誇となすに足らず。洒落本の描寫精細に進めるも、不健全なる社會の一面を反映せるものにして、不健全なる作物たるに過ぎず。戲作の文字の遂に戲作に過ぎざるは、遺憾の事といふべし。

國學者中、古文を用ひて小説を作れるものあり。然れども高尙にして一般人の嗜好に遠し。支那文學を翻譯することの行はれ

たるも、亦漢學隆盛の賜なり。一般學問の發達は、小説を稍、向上せしむるに至りて、勸善懲惡を寓して歴史小説を作るに至れり。之が代表者として作物の最も多く、亦傑作多きは曲亭馬琴なり。馬琴は漢學の素養少からず、國學にも造詣あり。其の學識を以て戲作の業を事とし、支那文學を翻案し、常に武士の典型を作物の主人公とせり。健全なる小説として當時に歡迎せられ、今も尙其の讀者を失はざるも、故なきに非ず。

三馬・一九の輩の、對話を主として滑稽を記し、又人情を描寫せる滑稽本あり、爲永一派の人情本あり。各特得の妙味ありて、文學として見れば論評の價值なきに非ず。是等はすべて江戸の文學とす。

小説よりも更に重大なる、否最も重要な近世文學の產物として見るべきは、劇詩の方面に於ける發達なるべし。是亦文藝時代

淨瑠璃

として最も着目すべき元祿の世の發展を著しとす。芭蕉、西鶴に對して、近松門左衛門は劇詩に於て新生面を開ける人なり。淨瑠璃の名は近古時代に發せるものにして、近松以前已に許多の淨瑠璃あり。三味線樂の發達と共に益、平民社會の趣味に投じ、次第に其の進歩を見しが、門左衛門に至りて其の文辭の絢爛なると、其の脚色の新奇なるとに於て、自ら新文學を作り得たりしなり。淨瑠璃は蓋し謠曲の平民化せるものといふべく、平語以來源平時代の事蹟は謠曲となりて普及せしが、謠曲の文や平民社會の耳に遠く、其の趣向もあまりに單純に過ぎたり。淨瑠璃は更に其の結構を複雑にし新奇にし、既有の事實を種々の形式に變化せしめて詩人的技巧を施し、以て庶民の嗜好に投ぜしめたるものなり。故に近松の歴史劇に於ては、其の歴史的人物は悉く徳川時代の人物と化し去り、又其の古英雄たる風貌を棄てて、平民社會の行動に近づけ

るものあり。茲に於て純史劇と稱すべからざるものあり。又其の地の文を有して、劇中の人物の性格行動によりて、事件の進行發展を促すこと無きが故に、未だ純劇詩と稱すべからずして、尙敘事詩の性質を脱せざるもの多し。

近松は晩年に至りて、多くの世話浄瑠璃を作れり。市井間に行はれし事件を以て義理と人情との衝突を寫し、匹夫匹婦を詩化して讀者の同情を惹き起さしむ。西洋の悲劇詩と其の歸趣を同じうするを見る。其の文章は近古文の系統を受けて、修飾遊戯に過ぎたれども、しかも卑語を厭はず、俗諺を棄てず、形式こそ古けれ、用語は新奇にして、輕妙巧緻を極めたり。然れども近松が文章の價値は、之よりも尙能く作中の人物の言語行動を寫して、其の人物の風采を想望せしめ得るに在り。是れ近古文學に見る能はざる所なりとす。紀海音も豊竹座の爲に執筆して、竹本座と相對立せり。

竹本座の作者としては、初に近松、其の死後、竹田出雲、近松半二の徒あり。學識文章もとより門左衛門の比に非ざれども、工夫合作して舞臺の上の効果を目的としたるもの多し。其の後歌舞伎に歡迎せられたるは、是等諸人の作に多し。いづれも人情を棄てて公道に就くの犠牲的精神を主眼とす。所謂義太夫節に演劇に、國民を感化せる力甚だ大なりしなり。

二 明治

時代の概観

明治の文學は、新聞紙上の所謂續き物と稱する小説に其の萌芽を發す。從來筆を政治論にのみ執りたる人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速なるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新たに脚色を立てて、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇、雪中梅、經國美談等は、當時最も喧傳せ

られたるものなるが、未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。然るに坪内逍遙の新文學論を唱ふるに及び、硯友社一派の新たに旗幟を樹つるあり。在來の戯作者系の人々も此に呼應して立ち、新文藝は蔚然として興りぬ。

蓋し、維新以來萌し來れる歐化主義は其の極に達し、其の反動として國粹保存論は盛んに唱道せらるゝに至り、國語教育の奨励、古文學の研究が隆昌を極むるに至りては、新文藝の先達も嘗に西洋の文學のみならず、我が國の古文學を顧みるに至れり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に、洛陽の紙價を貴からしめたる尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びて、其の新文體を創めしものなりき。

紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど其の題材は稍、單調なりき。稍、

小説

欠しうして世間は其の反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる心理小説を歓迎し、或は光明小説、家庭小説等と、幾度か流行は變遷しつゝ、日清日露の大戦を終りぬ。

戦勝に酔ひし豪奢の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。かくて從來の文藝批評家は、漸く人生の研究に轉進し來れり。或は高山樗牛の美的生活論となり、或は綱島梁川の見神説となり、或は自然主義といひ、或は無理想、無解決と呼ぶものあり。人生の暗黒面を誇張したる所謂自然派の小説は、此の間に出でぬ。而して此の混沌たる思想界を出でて、更に高く更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ぬるに至れり。

和歌

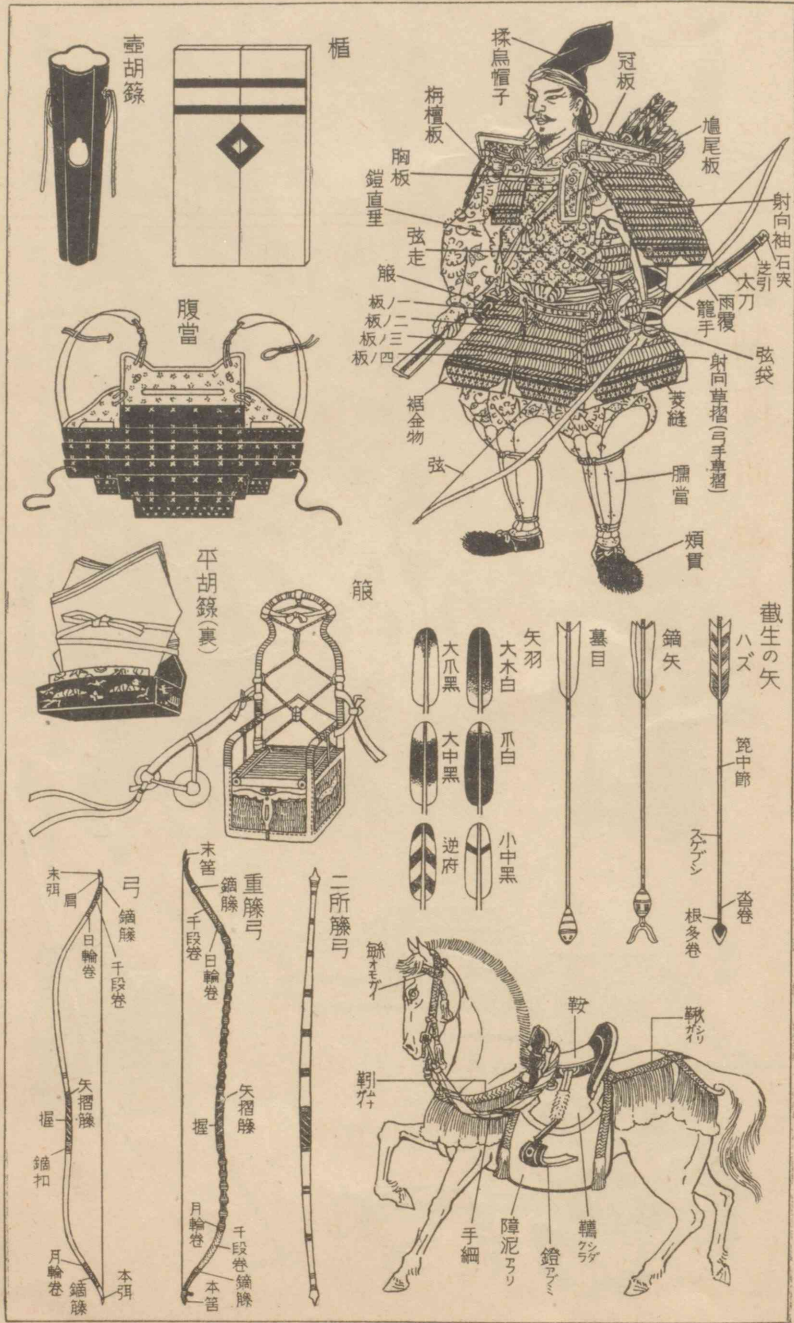
歌道には桂園の流れを汲むもの多かりしが、落合直文出づるに及びて、風雅を生命とせる月花の天地より、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるありて、天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、營に俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。此の派より出でて筆を小説につけたるものに、夏目漱石あり。

新體詩

此の他、明治の新文藝としては、別に新體詩あり。外山博士等が新體詩抄を以て始まる。ついで、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするものあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするものあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕の風、最も世に喜ばれたり。後、新詩の格調は日に新たなりと雖も、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものなし。

更に純文藝の範圍を出でて、専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、さきに福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては三宅雪嶺・徳富蘇峰・坪内逍遙・森鷗外・高山樗牛・大町桂月等あり。現代の普通文は、純文藝の著作より寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。

(芳賀矢一氏の所説に據る)



新制國語讀本 卷七終

助詞の用法(文語)

ね	らむ	助動詞	散るらむ
助動詞	時の助動詞	助動詞	散るらむ
完了の助動詞	打消の助動詞	助動詞	散るらむ
とく行きね。	人こそ知らね。	生けらむ。	散るらむ
	ばや	助動詞	矢にた
助動詞	願望の助動詞	助動詞	矢にた
条件と疑問の助動詞	助動詞	助動詞	矢にた
心あてに折らばや折らむ。	心あらむ人に見せばや。	心あらむ人に見せばや。	矢にた

語

ども	ほの	ひが	ま	さ	か
物ども。事ども。	ほの見ゆ。ほの暗し。	ひがめ。ひが事。	ま直中。ま心。	さ夜。さ迷ふ。	か弱し。か細し。

高田中学校
高田や学校
才に交るる

昭和十二年七月二十六日 印刷
 昭和十二年七月三十一日 發行
 昭和十三年一月十日 修正再版印刷
 昭和十三年一月十五日 修正再版發行

新制國語讀本

定價 卷一—卷九 各六拾錢
 卷十 各五拾八錢

新東條國文



製複許不

編者 東條操

發行者 株式會社 三省堂
 代表者 龜井寅雄

印刷者 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 龜井豐治

發行所

（東京市神田區神保町一五五） 株式會社 三省堂
 （大阪市西區阿波座下通二〇六） 株式會社 三省堂大阪支店

高田秋成村格成

廣島縣高田郡秋越村

廣島縣高田中學校

橋越保男



高



廣集果音口部 杖越冊

今田中學校

市田學

橋越保男

廣集縣音口部 杖越村

橋越保男